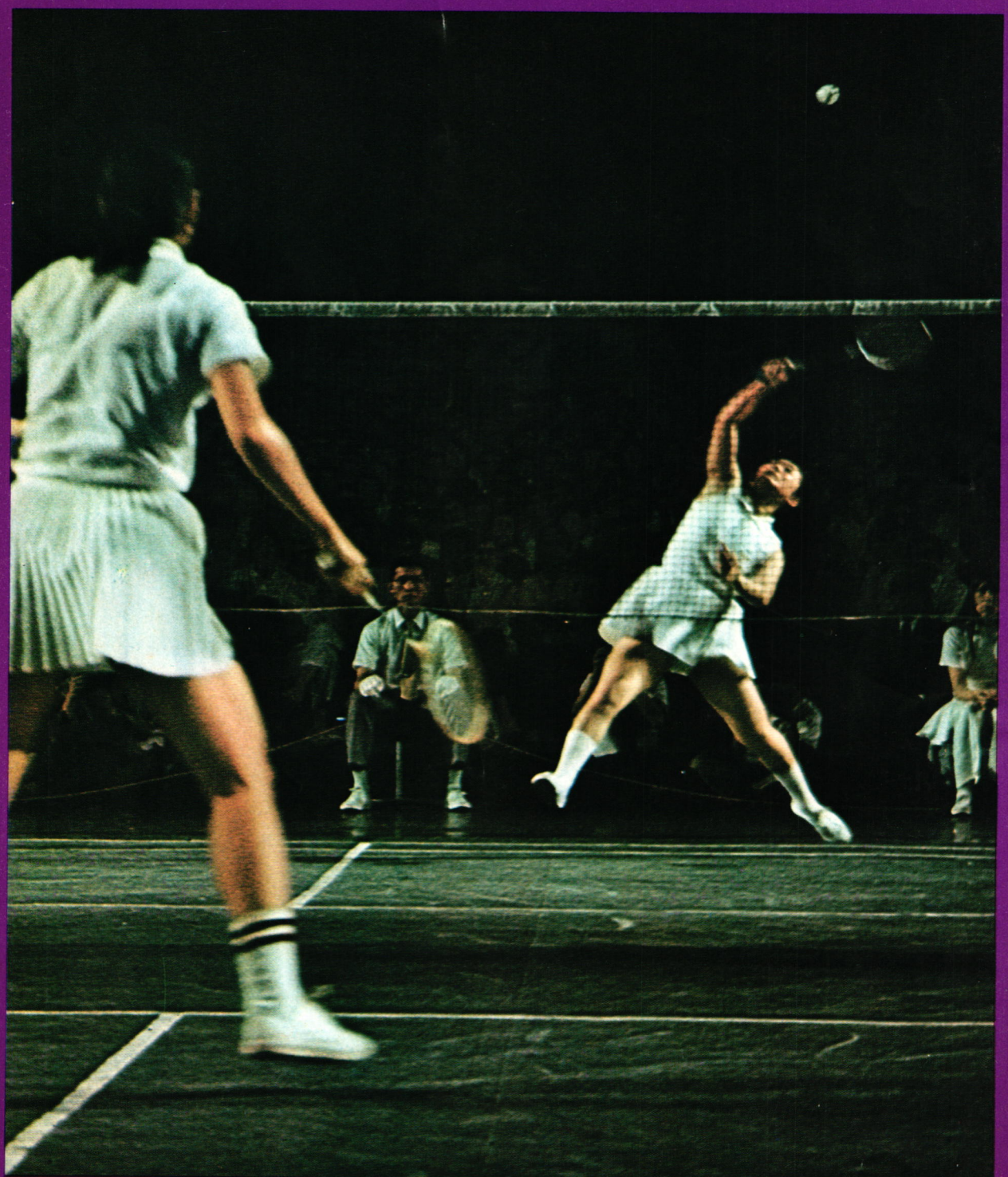
昭和44年12月23日第3種郵便物認可昭和47年7月1日発行毎月1回1日発行

日本バドミントン協会

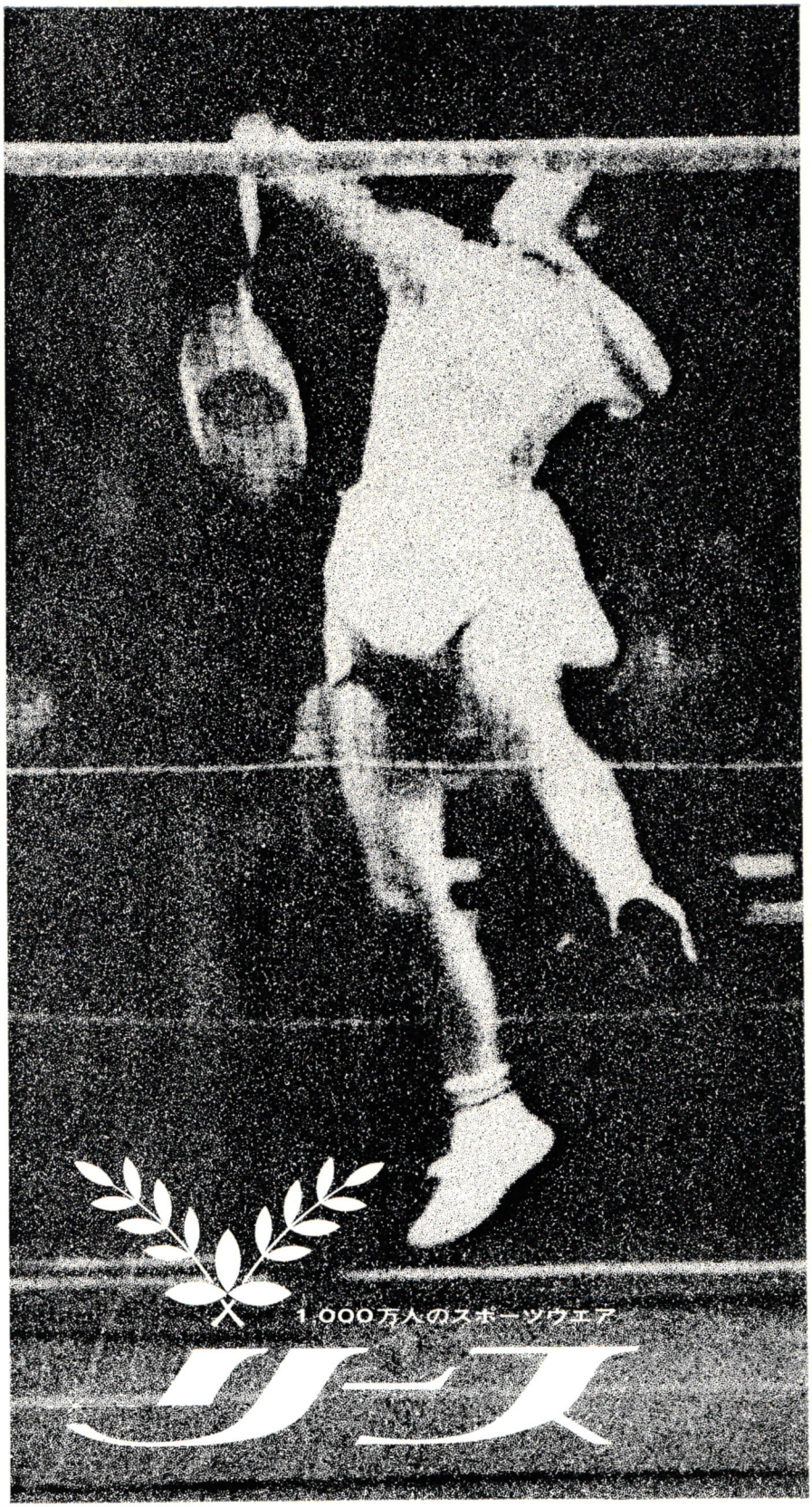
バドミントン界

THE BADMINTON WORLD

no.34
7
1972



この一瞬!!



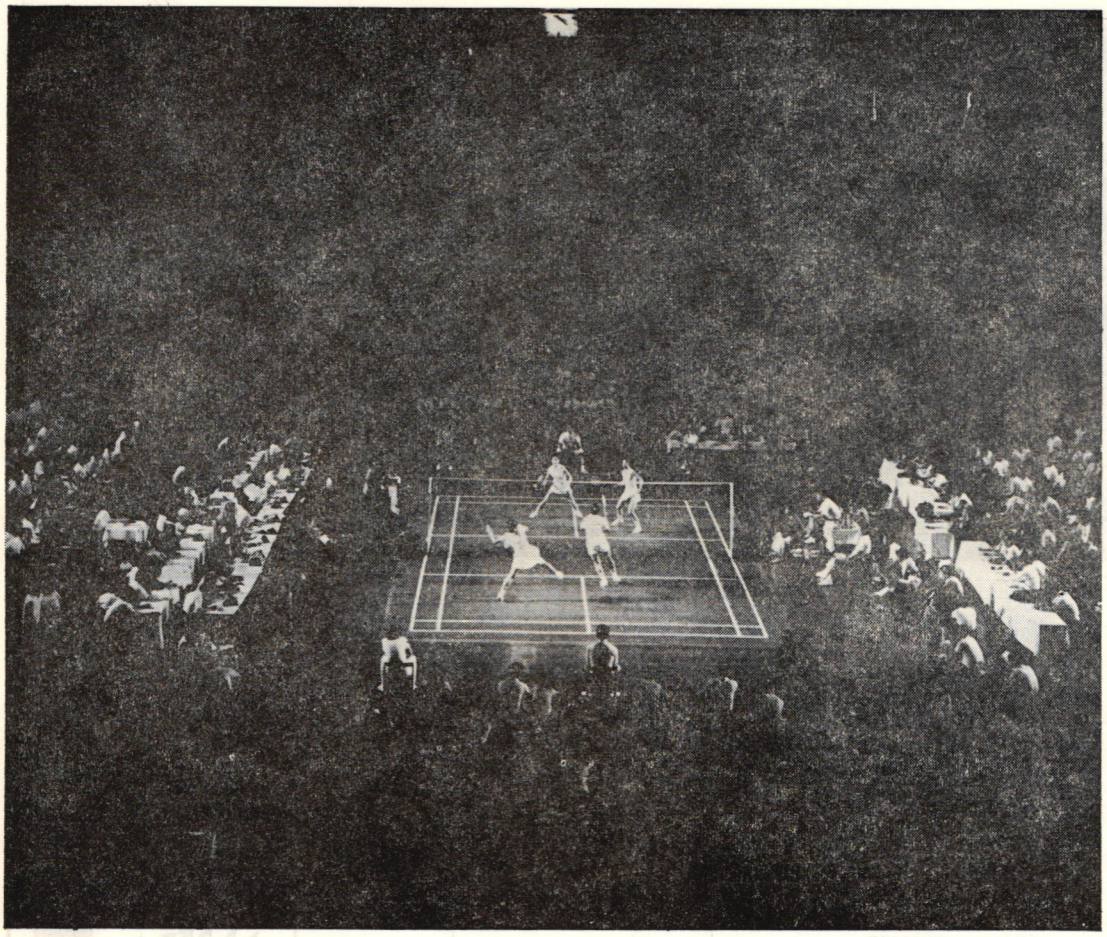
あなたはひかる――はげしい動き、ふき出す汗、すべての条件を
プレイヤー本位に満たすカワサキの〝リース〟はあなたのウエアです。

1,000万人のスポーツウエア

リース

K TOKYO

河崎ラケット工業株式会社
東京都台東区台東2-28-5 電話(831)-8840453



バドミントン界

〈47年7月号〉

……特集……ユ杯の三連勝なる

〔競技から〕栄光と熱戦のあと
・インドネシア緒戦を飾る（第一日）……3
・日本まず7－0、北欧の強豪もカタなし（第二日）……4
・インドネシア再び決勝へ（第三日）……6
・日本、宿願の3連覇なる（最終日）……8
参加国と組合せ表……2　歴代決勝一覧表……2
カナダのバドミントン……3　ニュージーランドのバドミントン……3
女も度胸〝ミチコ〟さん……5　大会に出場した選手たち……7
・柴山健闘〝次回〟へGO！（北海道親善試合）……34
〔よみもの〕神様に昇格した中山主将
・さすが大黒柱……10
・ノンちゃん、やっと夫君の胸に……11
・殿方ごめん遊ばせ、カガード夫人の悩殺ルック……12
・楽しんでますわバドミントン夫人……28
〈コートサイドの視角〉……30
・ニッポンは強すぎたよ　・語録　・ズバリ予想大当たり
〈スタンドの発言〉観戦者の手記から……32
〔グラフ写真〕（全12ページ）……15
・栄冠、涙あり――コートの裏表――
・中学生大会使用シャトルの再考を　伊藤　澄……36
・よく使われる用語……38　協会の動き……39
・今月の言葉……40　編集室……40

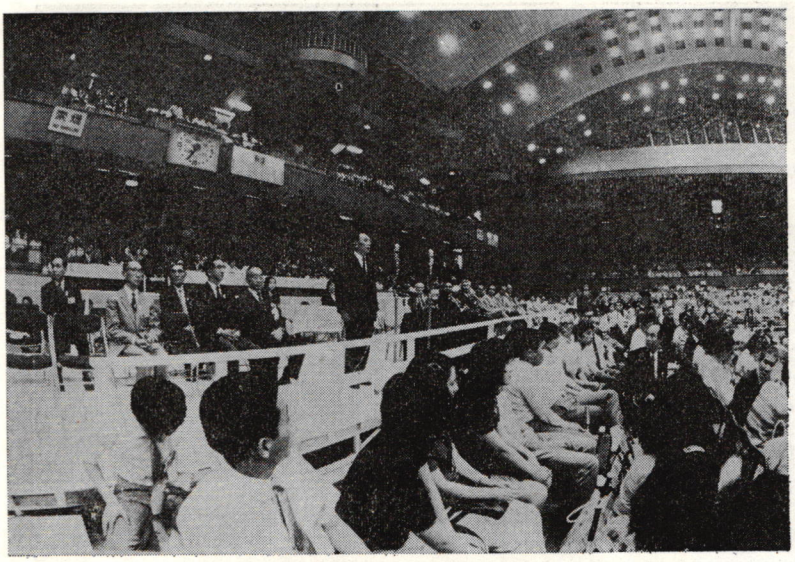
スタッフ／表紙撮影・松井亮磨／同制作・小浜正道／グラフ撮影ほか写真・MGスタジオ、山田真市、共同通信（提供）／イラスト・秦　浩／編集・明本薫／庶務・本島道子／協力・日本協会、同事務局、各加盟団体、愛読者

（お断わり）百万人の上達法、レコードは休載しました。

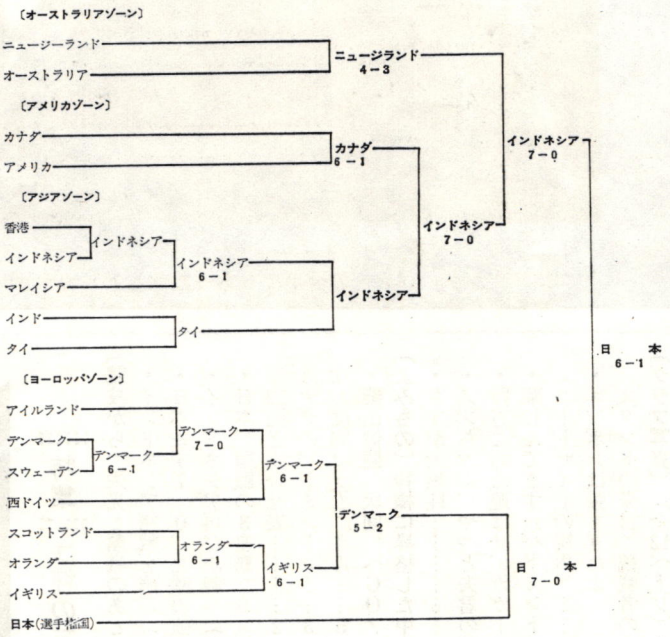
特集・ユ杯総まくり

栄光と熱戦のあと





川端理事長の開会宣言



歴代優勝のあと

(決勝のみ)

◇第1回 (1956～57)
アメリカ6－1デンマーク

◇第2回 (1959～60)
アメリカ5－2デンマーク

◇第3回 (1962～63)
アメリカ4－3イギリス

◇第4回 (1965～66)
日本5－2アメリカ

◇第5回 (1968～69)
日本6－1インドネシア

◇第6回 (1971～72)
日本6－1インドネシア

第1日

インドネシア緒戦飾る

インタゾーン1回戦あっさり7－0

カナダに完勝，準決勝へ

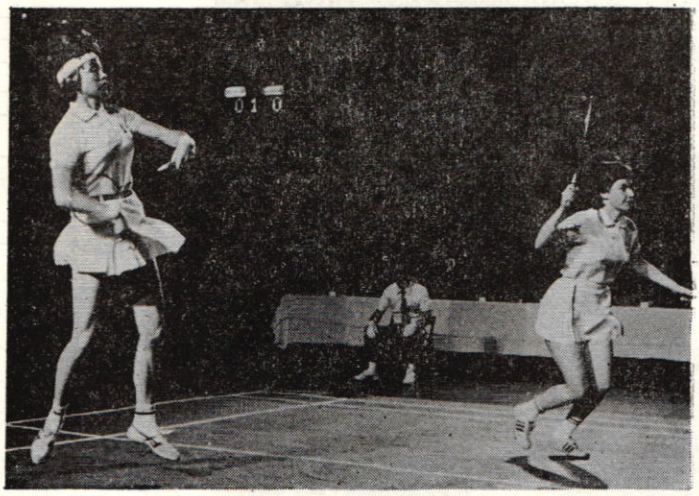
Indonesia 7－0 Canada

★singles

Utami	(11－2, 11－0)	McKinley
Taty	(11－7, 11－1)	Youngberg
Intan	(11－8, 11－8)	Rollick

★doubles

Intan Regina	(15－5, 12－15, 15－2)	Shedd Welch
Retno Poppy	(15－8, 14－17, 18－13)	Rollick Nilsson
Intan Regina	(15－8, 15－4)	Rollick Nilsson
Retno Poppy	(15－3, 15－9)	Shedd Welch



バスケット，バレーの選手でもあったシェド（カナダ）はハチマキ？しめてがんばったが，力の差はどうにもできなかった。

激しい〝女の争い〟

パシッ、パシッ。シャトルコックのかわいた打撃音が静かな館内に響く。フレヤースカート。ショートパンツ。〝白いチョウ〟を追う選手たちは一様に白装束。照明に浮かびあがった、そんなコートは変に厳粛なおもむきがあった。

ユーバー杯。迎えて六回目。第五回大会につづいて、三年ぶりに再び日本にやってきた。一回から三回まではアメリカ。四回からは日本が女王の座を守る。

平たくいうと、ただの羽根つき。が、優雅さを通り越した激しい〝女の争い〟だった。インドネシアはとことんカナダを打ちのめした。留学生たちの熱い声援と拍手も加わって、全員猛ハッスル。カナダはスマッシュをびしびし打つ直線的な攻めをみせる。が、インドネシアはことごとく拾った。

エース同士の対戦となった第一試合など、ウタミはマッキンレーにわずか2点。たった10分で片づけた。第二試合のタチも第一ゲーム前半、リードを許しながら一気に逆転。第二ゲームは1点を与えただけで破った。7－0の完勝。

O・ソリヒン・インドネシア・コーチはいう。「日本に勝ってユーバー杯をもって帰るのがわれわれの使命なんです」国技という宿命を背負って、楽勝にも表情がゆるまなかった。

むしろ負けたカナダの方がリラックス。「もう少しやれるかと思ったのに、大事なところでミスしたのがくやしいわ」とシェド。バレー、バスケットのナショナル・チームのメンバーでもあった同選手は、汗でぬれた顔の手入れに忙しかった。

（報知新聞＝6月8日付け）

カナダのバドミントン

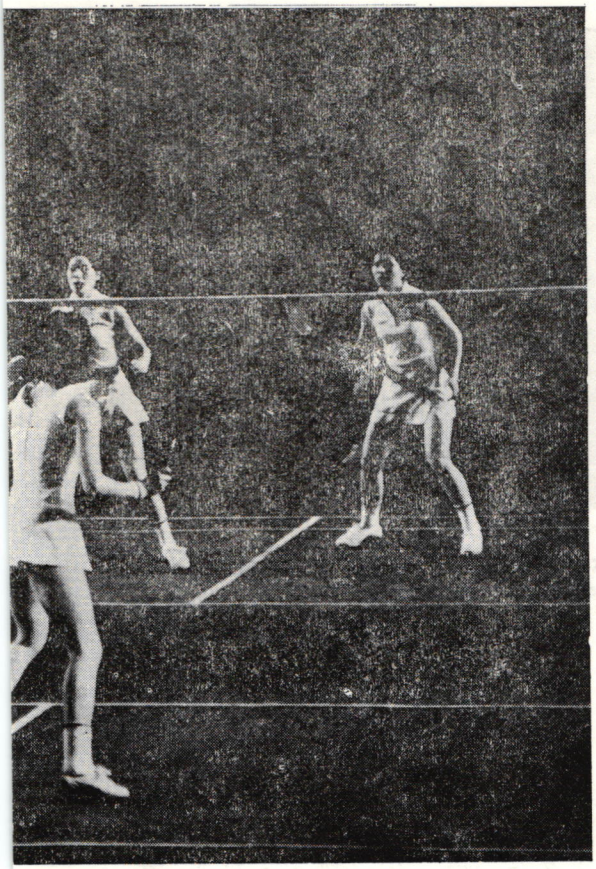
全国協会が設立されたのは一九二一年十二月、約五十年の歴史を持つ。オンタリオはじめ州協会が全国九ヵ所にあり、加盟クラブ177、登録会員一万九三九名を数える。

一年の半分は雪と氷にとざされる地方が多いため、室内競技の一つとしてバドミントンはなかなか盛んに行なわれ、毎年春には、世界四大トーナメントの一つに数えられるカナダ・オープンが開かれ、欧米一線級の選手が参加する。

中国との交流にも熱心で、米中ピンポン外交直後から名乗りをあげ、今日の代表は中国訪問の帰途、来日した。

ず 7—0

えなくダウン——



組は，初出場の相沢・竹中組を大いに苦しめず，フルゲームで敗れ，勝敗は決まった。

第2日
6月7日4時
（観衆五千人）

Japan 7—0 Denmark

★singles

Takasaka	(11—3 11—3)	Kaagaard
Nakayama	(11—4 11—0)	A. Jorgensen
Yuki	(5—11 11—0 11—4)	Nielsen

★doubles

Aizawa Takenaka	(15—10 11—15 15—5)	Flindt Kaagaard
Nakayama Yuki	(15—2 15—3)	K. Jorgensen Strand
Nakayama Yuki	(15—6 15—8)	Flindt Kaagaard
Aizawa Takenaka	(15—1 15—9)	K. Jorgensen Nielgen

明暗分けた初戦のシングルス

高坂のドロップあざやか　デンマーク、複の抵抗むなし

第一試合で両チームの明暗が分かれた。高坂は得意のドロップ・ショットで身長のあるカガードの体勢をくずし、自分のペースで冷静に試合を運んだ。チャンスとみればサービス・レシーブから一発エースをねらって強打を放った。

第一ゲームはいきなり5点連取。いったん5—3とつめられたが、その後は三度、サーブ権を与えただけ。第二ゲームのすべり出しで十度サーブ権の応酬がくり返され、弱点であるフォアサイド前陣を逆に攻められたときは危うかったが、これを切り抜けてからは、またペースを取り戻した。

カガードはドリブン・サービスからドライブ、長身を利してのスマッシュに光るものを持ってはいたが、たえず高坂に引っぱり込まれて、そのチャンスがなかった。

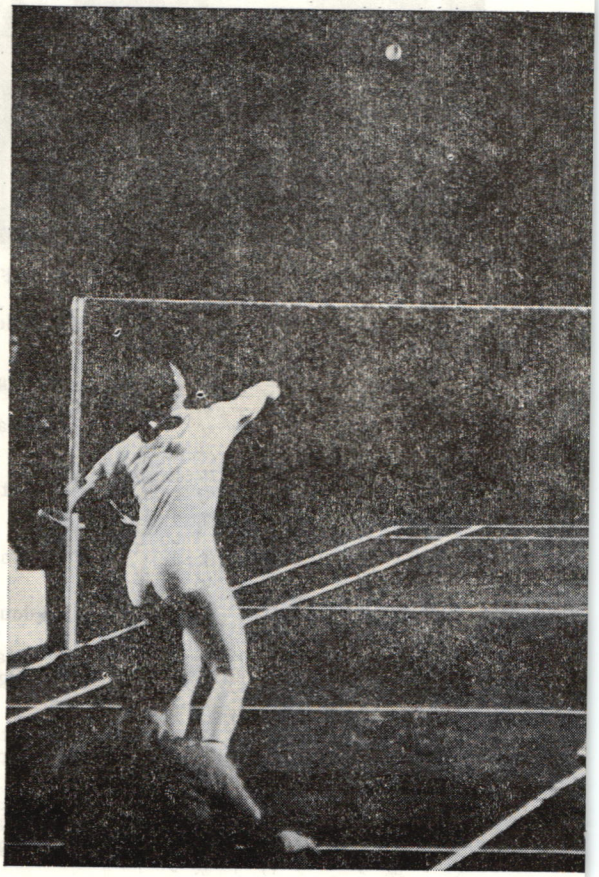
主将の中山がA・ジョーゲンセンを軽くしりぞけたあと、第三シングルスの湯木がかなりニールセンに手こずった。やはりアガっていたのだろう。強打が決まらず、変化をねらったドロップも甘く、第一ゲーム5—6から1点もとれずゲームを失なった。（東京新聞）

第一ダブルスが意外な接戦となったのは、館内の温度と関係があった。この試合、竹中がよく当たって第一ゲーム15—10で先取した。しかし第二ゲームにはいるとテレビ用のライトと人いきれでコート付近の温度が上がり、78グレーン（グレーンは重さの単位）のシャトルが飛びすぎた。そこで77グレーンに代えたが今度は飛ばない。このため日本ペアはリズムをくずし、小わざに出たのが、かえって老巧なデンマーク組を有利にする結果となった。

ファイナル・ゲームの前にシャトルを選び直し、両チームの合意で77グレーンの中でも比較的飛ぶシャトルを使ったため、今度は15—5で日本組が順当勝ち。（読売新聞）

日本ま

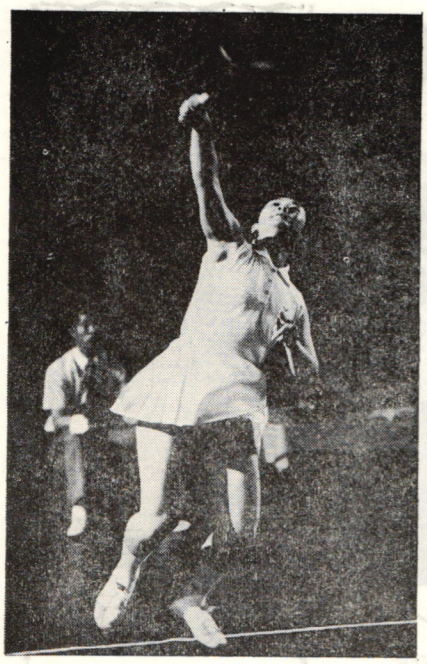
——北欧の美女お



ヨーロッパで一，二を争うカガード・フリン
たが，若い全英チャンピオンの前には歯が立

アブン・インドネシア団長の話　日本はシングルス、ダブルスとも、とてもすばらしい。私たちもできれば決勝に参加したい。そして日本チームとやりたい。しかしニュージーランドの若い選手との試合経験がないので、相手をあなどることはできない。とにかく次のニュージーランドとの一戦に全力を尽したい。私は一番いい試合をしたチームが決勝ラウンドに残り、優勝すると思う。日本ももちろんその候補のひとつだが、どこが勝つかわからない。

女も度胸 〝ミチコ〟さん



初出場でトップ・バッター。こんなイヤな大役を、高坂選手はみごとにはたし、日本完勝の原動力となった。

デンマーク戦に彼女が起用されたのは次の三つの理由からだった。①ドロップ・ショットがうまい　②打たれて強い守り型だ　③度胸がいい。

といって、抽選の偶然から彼女がまさか第一試合に当たるとは、関係者も考えなかったろう。日本からの登録は第三シングルスだったからだ。

初出場で〝先兵〟の大役果たす

日本完勝のヒロイン　高坂　薫

だが、アッと驚いていても仕方がない。チームは高坂を楽な気分にさせるため、からめ手から全力をつくした。

試合開始一時間前、日本の練習開始。堺コーチは高坂の相手に相沢をひっぱり出し、ドリブン・サービスを打たせた。相沢たちは何度かの遠征で高坂の相手カガード夫人が、ドリブン・サービス、ドリブン・クリアの使い手であることを知っていた。そこで高坂の〝仮想敵〟をつとめたのだ。

いよいよ試合開始。毛利監督は「妃殿下におシリを向けるなよ」といいながら、ポンと高坂のおシリをたたいて送り出した。この日スタンドには、デンマーク・ファンの美智子妃殿下と浩宮様がお見えになっていた。

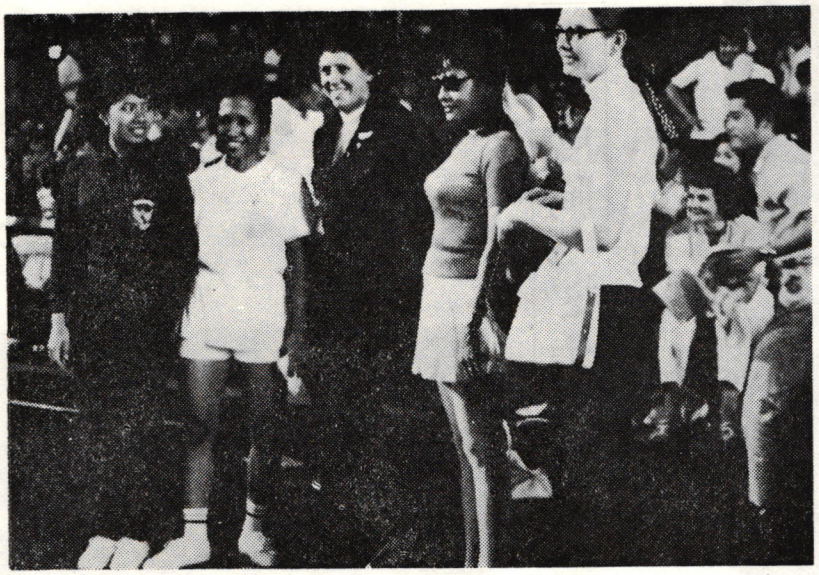
「緊張はしましたが、アガりはしませんでした。アガるひまもなくて…」熱戦の終わったスタンド裏。汗をふきふき、高坂はいった。そして、チームの心くばりが自分をリラックスさせた、と説明した。

本誌のアンケートに「ニックネームなし」と答えたが、実はおそれ多くも〝ミチコさん〟といわれ、その落ち着いたムードから〝ママさん〟ともいわれているそうだ。

学生時代から「バドミントン人間になりたくない」といい続けていた高坂も、この日だけは幸福そうな笑顔だった。

インドネシア再び決勝へ

複でようやくゲームをとる　ニュージーランド完敗



戦い終われば友人　仲良く記念撮影するインドネシア，ニュージーランド

Indonesia	7 — 0	New Zealand
★singles		
Intan	(11 — 2, 11 — 1)	Walters
Taty	(11 — 3, 11 — 5)	Glenie
Utami	(11 — 7, 11 — 5)	Branfield
★doubles		
Intan Regina	(15 — 3, 15 — 5)	Walters Waller
Retno Poppy	(10 — 15, 15 — 11, 15 — 10)	Branfield Glenie
Intan Regina	(11 — 15, 18 — 15, 15 — 9)	Branfield Glenie
Retno Poppy	(15 — 4, 15 — 8)	Walters Waller

第3日
6月8日　4時
（観衆二千人）

シングルスはどの試合も10分位でストレート勝ちして、早々と勝利をものにしたインドネシアだが、ダブルスでは、インタン、レジナ組、レトノ、ポピー組ともに、ニュージーランドのブランフィールド、グレニーの姉妹ペアに苦戦した。

いずれも第一ゲームを落とし一時は第二ゲームもリードされて、黒星をつけられると思われたが、ニュージーランドはミスで自滅した。

インドネシアとニュージーランドの対戦は、バドミントン競技者と〝羽根つき愛好家〟の試合のようだった。ニュージーランドはネットにひっかけるなどミスが多く、特にバックは見るからにぎこちない。

ブランフィールド、グレニー姉妹は他の欧米選手と違ってスマッシュよりドロップ・ショット、ヘアピンなどが多く、インドネシアからネットぎわでのミスを誘った。そしてスマッシュはサイドハンドからの叩きつけるようなかっこうが多く、この変則的〝荒れダマ〟が時々きまったにすぎない。

それにしてもインドネシアのダブルスは日本よりかなり力が下のようだった。インドネシアのスタンリー監督も「調子は完全ではない。ダブルスが会場の空気に慣れていないようだ」と認めていた。

（毎日新聞）

ニュージーランドのバドミントン

一九二七年に連盟が創設され同時に国際連盟に加入した。オークランド、ウェリントンなど各州支部協会は20カ所を数え、クラブ数は、およそ350、登録会員一万三千百六十三名に及ぶ。人口の多くない国としては普及率が高い。六六年の第四回大会（日本が優勝）をウェリントンで開催している。

大会に出場した外国選手たち

INDONESIA

デビ・ウタミ（Dewi Utami）21歳、158㌢、学生、ハルトノの妹。69年インドネシア選手権優勝。未婚。



ケスティジャ・レトノ（Koestija Retno）30歳、152㌢、体育学教師、69年カナダ選手権でシングルス、ダブルス、混合の三冠制覇。未婚。

スミラ・タチ（Sumirah Taty）19歳、160㌢、学生。新人。未婚。

インタン（Intan）26歳、155㌢、会社秘書、一時プレーを遠ざかっていた。未婚。

ポピー・ツメンコール（Poppy Tumengkol）24歳、163㌢、学生。69年インド選手権ダブルス優勝。未婚。

マスリ・レジナ（Masli Regina）20歳、160㌢、学生。新人。未婚。

テオドラ（Theodora）23歳、158㌢、事務員、初出場。未婚。

CANADA

ナンシー・マキンレー（Nancy McKinley）23歳、学生。カナダ選手権70年ダブルス、71、72年シングルス優勝。初出場。



ジュディ・ロリック（Judy Rollick）27歳、教師。カナダ選手権69年シングルス、混合、72年ダブルス優勝。ユ杯二度目

ミミ・ニルソン（Mimi Nilsson）36歳、実業家。カナダ選手権72年ダブルス、71年までに混合で3度優勝。ユ杯二度目、既婚。

マージョリ・シェド（Marjory Shedd）スポーツ・コーチ。カナダ選手権でシングルス6度、ダブルス11度、混合5度優勝。バスケット、バレーで元カナダ選手権優勝チーム・メンバー。スポーツ名誉の殿堂メンバー。ユ杯六度目。未婚。

バーバラ・ウェルチ（Barbara Welch）25歳、秘書。カナダ選手権69年、71年ダブルス優勝。デンマーク・オープン71年混合2位、ユ杯二度目、既婚。

ジェーン・ヤングバーグ（Jane Youngberg）23歳、教師、カナダ選手権ジュニア・ダブルス3度優勝、初出場、既婚。



NEW ZEALAND

ヒーザー・ロブスン（Heather Robson）44歳、主婦、168㌢、シングルス優勝7度を含み、19の国内タイトル保持者。既婚。

アリソン・ブランフィールド（Alison Branfield）27歳、168㌢、教師。ニュージーランド・オープンに6度優勝。ユ杯二度目。既婚。



ロビン・グレニー（Robin Glenie）21歳、171㌢、幼稚園保母、アリソンの妹。ニュージーランド選手権69年シングルス優勝、ダブルス（姉と組み）選手権保持。初出場。未婚。

フランシス・ウォルターズ（Frances Walters）25歳、178㌢、経理事務員。71年オースチン招待シングルス・トーナメント2位、初出場、未婚。

グレニス・ウォーラー（Glenys Waller）24歳、176㌢、教師。ジュニア・タイトルを3度とり、近年ウェリントン地方で最も期待されている選手。初出場、既婚。

DENMARK

アニー・ジョゲンセン（Annie Jorgensen）21歳、178㌢、事務員。デンマーク選手権68、69年ジュニア・シングルス、ダブルス優勝、国際代表二度目、初出場、未婚。



イムル・ニールセン（Imre Nielsen）26歳、165㌢、主婦、結婚でオランダから帰化。デンマーク選手権69年、70年シングルス優勝、70年欧州選手権2位。

カーリン・ジョゲンセン（Karin Jorgensen）32歳、167㌢、主婦。デンマーク選手権62年シングルス、62年から8度ダブルス優勝、全英選手権64、65年ダブルス優勝。

ウラ・ストランド（Ulla Strand）29歳、168㌢、主婦、カーリンの妹。デンマーク選手権シングルス63年から3度、ダブルス62年から71年まで8度優勝。全英選手権64、65、67年ダブルス優勝、65年シングルス2位。

アン・フリント（Anne Flindt）29歳、166㌢、弁護士。デンマーク選手権68、72年ダブルス優勝。



ペルニール・カガード（Pernille Kaagaard）25歳、174㌢、デザイナー学校出、建築家。デンマーク選手権64年シングルス、72年ダブルス優勝。全英選手権70年混合優勝、既婚。

願の3連覇なる

最終日
6月11日2時
（観衆一万人）

インドネシアまた涙

6－1王座に遠く届かず

予想どおりの優勝。だが決勝は必ずしも楽な戦いではなく、6－1のスコア以上に内容はもつれた。この雌雄を決した一戦を各記者はどう見たか。あえて三通りの評を紹介した。

×　×　×

〈朝日新聞〉

実質的には4－1で決着をつけたのだが、内容的には数々のアヤを持っていて、決して楽勝のケースではなかった。そのアヤをたぐってみると、第一は相沢、竹中組の苦戦である。このペアは今年度、全英選手権に優勝、簡単に勝利を手中にすると思われていたが、立ち上がりからバランスをくずしていた。不調なのか相沢がネットについていたため、竹中が行動半径を大きくされ、負担がかかっていた。これはコートでの回転のいいインドネシアの二人とは、まったく対照的であった。

第一ゲームこそ日本ペースだったが、ベテランのインタンがレジナの強打を生ませる好コンビで8、9オールとせり合ってから、一気に13－9と相沢のミスに乗じて引き離し、このゲームをものにした。

日本はこのダブルスを失えば2－2のタイになる場面。日本ペアには悲壮感さえにじみ出たが、ファイナルのスタートに相沢の打込んだサーブが、インドネシア勢の背後をつくきわどいものとなって連続2ポイントをあげ、ゆとりを取戻した。このゲームも6－5とリードを許す場面もあったが、コーナー、コーナーを突く日本のショットがようやく実って勝った。

もう一つは第一シングルスの高坂の敗北である。老巧なインタンは高坂のスピードを封じ、ネットぎわでの妙技を十分に発揮、前後のゆさぶりをまじえて高坂をくだしたが、高坂はもっと持ち前のスピードを生かしてインタンのタイミングをくずすべきだった。

〈読売新聞〉

インドネシアのシングルス三人は、ほとんど同じ体格、同じタイプのプレー。そして実力もほとんど接近していた。全英チャンピオンになったことのある日本の中山、湯木とくらべるとかなりの差はあるが、国内6位の高坂よりもインドネシアのレベルの方がやや上のようだ。

第一シングルスの高坂は、堅くなってデンマーク戦のようにカットが決まらず、前さばきのいいインタンにネットぎわのタマを拾われ、苦しくなって相手のエンドラインをねらったのがほとんど外に出て惜敗。

しかし、湯木は相手をよく見てタマを散らし、相手のバックをスマッシュ、ドロップなど多彩なタマで効果的に攻めた。中山も軽快なフットワークとタマすじのよさで、男子世界チャンピオン・ハルトノの妹ウタミをほんろうした。

事実上の勝負を決める第一ダブルスは四つに組んだ接戦。第



連勝にベンチは早くも笑顔のウズ

史上 日本，宿 タイ

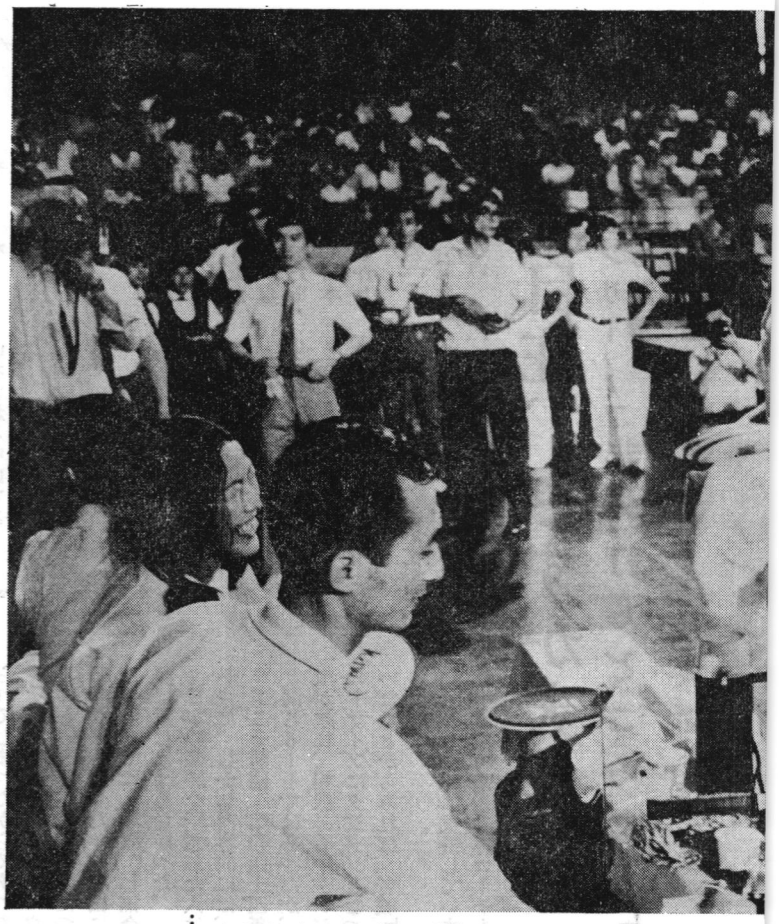
Japan　6－1　Indonesia

★singles

Takasaka	9－11 11－7 3－11	Intan
Yuki	11－4 11－3	Taty
Nakayama	11－2 11－0	Utami

★doudles

Aizawa Takenaka	15－5 11－15 15－7	Intan Regina
Nakayama Yuki	15－9 15－11	Retno Poppy
Nakayama Yuki	15－8 15－8	Intan Regina
Aizawa Takenaka	15－8 15－9	Retno Poppy



あと1ゲーム　第2ダブルスで1ゲームを先取，目前

一ゲームはレジナに調子が出ず日本が15－5で楽勝。第二ゲームは相沢、竹中のタマすじに慣れたインドネシアがよく粘って15－11とゲーム・カウントをタイにし、最終ゲームも日本がインドネシアに追いついて6－6と会場をわかせたが、日本ペアは相沢の小ワザと竹中の強打がうまくかみ合って辛勝した。

第二ダブルスは中山・湯木組が追いすがるレトノ・ポピー組を終始リードして逃げ込み、日本は三年前の前回と同じ経過で勝負を決めた。エースのミナルニを欠いたものの、シャトルに食い下がってくるインドネシアの粘り強さはさすがだった。

〈東京新聞〉

高坂はフットワークとバックハンドでややインタンに劣った。インタンはしきりに高坂のフォアの前陣を攻め、高坂がホームポジションに戻り切らぬうちに角度あるストロークでバックサイドを突いた。

第2ゲームこそ高坂がうまくドライブを使ってペースをものにしたが、第3ゲームではインタンがサービスをショート・サービスに切り替えるとレシーブが乱れた。こうなるとドロップ以外に決定打を持たない高坂は苦しい。1－0から一挙に6点を献上、万事休した。

高坂の黒星が気の弱い湯木に心理的な影響を与えた。堅くなった湯木はすべり出し腕がのび切らず、たちまち3－0と離された。しかし本来の実力はケタ違い。タチはいい強打を持っていたが、あまりにもキメが荒すぎてミスが多く、湯木に立ち直りの機会を与えてしまった。

第3シングルスの中山は完ぺきに近いプレーをした。四角を丁寧につくタマくばりで全く相手をほんろう、第1ゲーム2オール以後、試合終了まで4度サーブ権を与えただけだった。

最初のダブルスで相沢組は苦しんだ。1ゲーム先取したが、相手がドライブ、プッシュを多用して前陣速攻に出たため、攻撃のキメ手を見失ないゲーム・オール。最終ゲームいきなり相沢が2本、サービスを後陣の両角に落としてエースを奪い、調子を取り戻した。実質的にはここで日本の勝利が確定した。

格した中山主将

昨年結婚したばかりの中山主将が、汗をふく仕草で涙を拭きながら「本当に勝ってよかった」と実感をこめてひと言。主婦と会社勤め、主将、練習といった苦労を克服したうれしさでいっぱいだった。

（朝日新聞）

＊　＊

「くやしいけど、いつまでたってもミセス・ナカヤマの域には…。とても私では…」この日対戦したウタミはいった。「ワンダフル・ガール。プリティ」デンマークの〝ノーブラ選手〟カガードは賛辞を惜しまなかった。いまや女王を通り越して神様的な扱いをされる中山である。

（報知新聞）

緩急自在、さすが大黒柱

スタンリー監督も激賞「非の打ちどころなし」

やっぱり中山だった――だれしもが、そう感じたにちがいない。もし、中山がいなかったらいや、もちろん、それでも日本は勝ったかもしれない。しかしレトノの黒い顔が涙でぬれていた。それはあるいは汗が電光に映えていたのかもしれない。

それでも、中山が主将として現実に示した活躍は、予想以上のものだった。各紙は、こぞってその功績をほめたたえ〝神様あつかい〟とまで書いた。

ただ周囲の目には泣いているように見えた。

中山のスマッシュしたシャトルは、**レシーブしたレトノのラケットをはじいて、無情にもネットに当たってポトリと落ちた。トータルスコア3－1で迎えた第二ダブルスの第二ゲーム。レトノとポピーは辛抱強く粘りに粘った。**

14－7のマッチポイントから中山・湯木という世界NO・1ペアを相手に、実に11ポイントまで追いあげたのである。それが「手練」と呼ぶには、あまりにもケレン味のない、地味で完ぺきな中山に、ぴしゃりと封じられてしまったからであった。

それは第三シングルスのウタミにもいえた。ミナルニにつぐ巧者ウタミだったが、中山に第二ゲームでは〝零敗〟し無念の涙は隠しようもなかった。

日本の楽勝を予想した人は多かった。しかし内容的には、スコアこそ前回（昭和四十四年）と同じ6－1ではあったが、高坂が敗れ、相沢・竹中がレジナのドライブにタジタジとなっていたことからみれば「苦戦」であった。

「この程度は覚悟していました」と毛利監督も堺コーチもいう。

やっぱり老練〝中山〟に負うところが大きかった。

ウタミには、シャトルの羽根を指でそっと直して、タイミングを狂わし相手をじらせ、ダブルスでは湯木に得意のスマッシュを打たせず、ドロップショットでかわさせ、自分が打って出る緩急自在の作戦と攻守。そしてどんなに難しいシャトルも、拾いに拾って、相手を自己嫌悪に陥らせる巧妙な心理作戦。それもこれも、実力が伴わなくては出来ぬ技だった。

「日本チームは体力的にもインドネシアより上だった」とスタンリー監督はいった。そして「ミセス中山はパワー、テクニックとも申し分ない。一点の非の打ちどころもない好選手だ。わが国のハルトノ（全英男子五連勝）に勝るとも劣らぬ名選手である」と激賞した。その中山も、もう二十九歳になる。

三年後、インドネシアがさらに強くなるのは請け合いだ。三度、金色に輝くユーバー杯を手にして、中山はどんな気持ちだ

10年ひとすじ 女の意地 “神様„に昇



中山のスマッシュをレトノがネットにひっかけた瞬間、日本の三連勝が決まった。熱狂する大観衆。湯木とともにベンチに帰ってきた中山は、たちまち、祝福にかけつけたインドネシアの選手、国際連盟役員などの握手攻めでもみくちゃになった。

吹き出す汗をぬぐおうともしないで、いちいち笑顔でこたえる中山。そんなヒロインを薄暗い審判席からジッと見つめる熱い視線があった。殊勲者・中山の夫君、広明さん。「彼女、手首の痛みをかくして出場したんです。これさえ着ていなかったら、飛んでいって抱きしめてやりたい」と審判の真っ赤なブレザーコートがうらめしそう。

控え室に向う途中、二人の視線がチラッと合う。「ノンちゃん（中山の愛称）おめでとう。やっと終わったね」「あなた、長いことほうっておいてゴメンナサイ」——。言葉こそかわさなかったが、二人は胸の中でこういったに違いない。

…ノンちゃん、やっと夫君の胸に…

中山夫妻が結婚式をあげたのは、昨年十月三十日。披露宴の祝辞で、先輩から「ユーバー杯が終わるまで、赤ちゃんはお預けだよ」といわれたことが、晩婚だった二人の耳を離れない。しかし、ベビーをつくるヒマなど、この二人にはなかった。六回にわたる強化合宿とヨーロッパ遠征、デンマークを迎えた国際試合、そして国内の競技会……。

ノンちゃんは結婚してから合計七十二日も家をあけている。三日に一日は帰宅しない新妻。合宿がないときも、週に三、四回は会社の仕事が終わると、母校の日女体大へ自主練習に行き帰宅は深夜近くになった。

「練習なんかしなくても勝てるのに」と無責任な人たちはいっていたが「スポーツとは勝つための努力をすることだ」と考えているノンちゃんには、こんな言葉は聞えなかった。

家に帰らないことでは、ご主人の方も同罪だったかもしれない。一ヵ月の半分は泊りの勤め（北辰電機勤務）のスレちがい生活。大会が迫ってからは、役員である広明さんのほうが忙しくなった。だから「〝帰宅率〟はいい勝負よ」と口をとがらす中山選手。

閉会式で地球をかたどった、きらめくユーバー杯を手にしたノンちゃんの感想は「勝ってよかった」だった。彼女の本当のゴールは、ユーバー杯を三たび胸に抱くことではなく、夫君の胸に帰ることだったのが、その一言からにじみ出ていたようである。

（読売新聞＝小林範夫）

ったろうか。「これで、やれやれです」——と中山はいった。短いことばに、長かった十年の歳月の重味がこもっていた。だが、この大黒柱がいなくて、日本は史上初の四連勝を飾れるだろうか。

「戦いは、きょう、これから始まった」と、堺コーチはいった。中山に三年後を託すようではならないのだ。勇者はやはり勇者として、そっと送るべきではあるまいか。

（日刊スポーツ＝盛川　宏）

カガード夫人の悩殺ルック

――ホットパンツにノーブラ――

目も楽しませてくれまぁす

ホットパンツにポロシャツ。その下はいまはやりのノーブラ。「いまでは、みんなこんなかっこうよ」海外経験豊かな竹中が「はじめはこっちも赤くなったけど」と前置きして教えてくれた。わざだけでなく、目も楽しませてくれたデンマーク。が、やはりスポーツは強者が美しい。（報知新聞）――大会第二日の七日、日本と対戦したデンマークは、まず、その〝服装〟で観客席の目を奪った。アッと思ったのは記者席も同じ。翌日の紙面で、各紙はいっせいに、このことを話題にした。



〈サンケイスポーツ〉

この日の日本の相手、デンマークは、勝負では完敗だったが〝お色気〟ではチャンピオン確実ともっぱらの評判。スケスケのスタイルに短いショートパンツで日本を圧倒した。なかでも強烈だったのは、最初に登場したカガード。ノーブラで、しかもショートパンツの下は、どう見てもなにもはいていない感じ。ダブルスではお色直しして、こんどはレースのスケスケワンピース。これが汗でべっとりと肌にくっついたからたまらない。「さすがは北欧の選手、すすんでるゥ」とニヤニヤするのはコートサイドの男性ファンだったが、日本の女子選手は「外国ではあんなの珍しくないワ。でも私たちは自信がないからやらないの」

〈デイリースポーツ〉

日本と対戦したデンマークの女性軍。強烈なスマッシュもさることながら、スケスケ・スタイルのコスチュームに周囲はガヤガヤ。短いショートパンツに半そでシャツ。貧弱な体格の日本選手を威かくでもするように大柄な体から健康なお色気をふりまいたが、日本の相沢マチ子選手の感想は「向うで初めて見たときはびっくりしましたが、もう慣れっこになりました。スタイルがいいから、よく似合いますね」観客は悩殺できても、対戦相手には通じなかったようだ。

〈毎日新聞〉

デンマークのペルニール・カガード夫人はコート・ファッションのデザイナー兼モデル。シングルス先陣に登場したときは白いシャツとショートパンツ。ダブルスでは白いレースのワンピース。いずれもノーブラジャーで、コートいっぱい駆回ったが、幻惑?されたのは相手の日本選手ならぬコートサイドの観客席のようだった。

〈朝日新聞〉

女性スポーツとは……「もちろん勝つことさ」「いや女だから色気も絶対必要だよ」とカゲの声もある。

バドミントンの世界選手権で日本と対戦したデンマークのカガード選手は色気をふんだんにまき散らした感じだった。ダブルスに出てきたとき、シングルスのときと服装がガラリと変わっていた。ノースリーブ、エリのところに大きなきり込み。超ミニ。しかもノーブラ、布地がレースなので、男性の目はもっぱらカガード選手へ。

彼女の職業はファッション・デザイナーと聞けば、なるほどというところ。デンマーク・チームにはこのほか美ぼうのニールセン夫人がおり、試合に負けて人気で勝った格好。

カガード夫人の話　別に驚くほどのことじゃないわ。ブラ無しの方がプレーしやすいもの。

女性は強い、役員をフトンむし

○…昼間、練習でこってりシゴかれたお返し?に、ある夜ついに堺コーチと山本マネは選手らの手でフトンむし。グロッキーになった両氏、翌日も痛む足、腰をさすって「女性はホントに強くなったヨ」とボヤくことしきり。だが、荒っぽいばかりでないのはもちろんである。

（東京中日スポーツ）

中味よりも表が立派!?ユニフォーム

○…選手が開会式で勢ぞろいすると、若い女性の大会とあって、その服装もいろとりどり。カナダは赤のブレザーに紺のミニ。デンマークはエンジのブレザーと白のパンタロン。インドネシアはエンジのトレーニングシャツ、パンツ。

ニュージーランドがブルーのパンタロンスーツ。日本チームは白のニットのワンピースに赤、黄、紺のタテじまのブレザーとひときわカラフルないでたち。〝女王〟にふさわしいあでやかさだが、これがなんと既成品。

中山主将は「中身の落ちるのを着るものでカバーしようときれいな色を選びました」とけんそんしたが、みんな、なかなかよく似合い、ドレスの面でも〝最強〟を誇っていた。

（毎日新聞）

〝ノーモア・スキヤキ〟だわ

○…デンマーク・チームきっての美人で、ダブルスでは全英選手権に優勝したこともあるストランド選手が〝ノーモア・スキヤキ〟と、悲鳴をあげた。

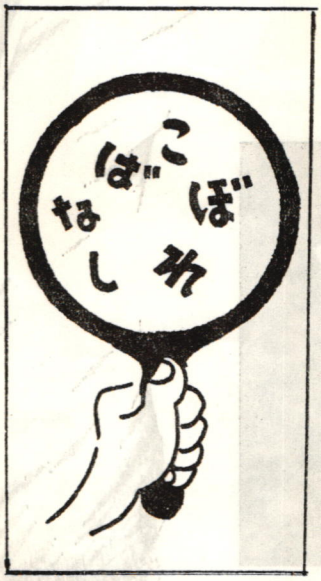
前夜（6日）日本でお目当てにしていたスキヤキに舌つづみを打ったのはよかったが、あまり食べすぎて胃袋がびっくりしたものかかんじんの試合当日、あちこちにジンマシンが出始めた。ポリポリやりながらの試合では勝てるわけがない。

彼女の出番は、デンマークの敗戦が決まったあとのダブルス第2試合だったが、日本の中山・湯木組にあえなく完敗「もうスキヤキはこりた。医者もクスリも効き目がなかったの」とこぼしながら、最終ダブルスはニールセン選手に〝救援〟してもらい、ハダシでとぼとぼ引き揚げた。

（サンケイ）

美智子妃、浩宮さまもお揃いで

○…美智子妃殿下と浩宮さまが、この大会名誉総裁の秩父宮妃殿下とともに、シングルス三試合をご観戦になった（7日、日本×デンマーク）美智子妃と浩宮さまはバドミントンの公式大会は初めてとあって、大変、興味深げ。浩宮さまは東宮御所でバドミントンを楽しんでおられるそうで、ご説明役の森友徳兵衛日本バドミントン協会副会長に「あのプレーはなんというプレーですか」などと鋭いご質問を浴びせられた。



また美智子妃もテニスをおやりになっていた関係から、これまた専門的なプレーについて森友副会長に、しきりにおたずねになっていた。この夜、宮中の行事があり、シングルス三試合だけで、残念そうにお帰りになられたが、森友副会長から「十日にテレビで、この試合のビデオ放送がありますから、ぜひごらんください」といわれ、お二人は、「必ず見ます」と答えられた。

（サンケイスポーツ）

大会前半はスズメも観戦

○…「前回満員だったから」と今回も大入りを予想していた日本協会だが、この三日間の入場者は最高が日本―デンマーク戦（七日）の五千、この日もわずか二千人という不入りで、百二十万円以上をかけて作った仮設スタンドはガラガラ。「これでは世界選手権どころか、全日本選手権なみだ」とボヤく役員も出るほど。

会場の東京体育館は収容人員約一万人。器が広すぎて、〝閑古鳥〟が鳴くどころか、試合中に迷い込んだスズメがコート上を飛ぶほど。日本が米国に続き、史上二度目の3連覇をねらう十一日は、協会の思惑どおり満員になるか。

（デイリースポーツ）

「ワカリマシタ」と熱狂的母国応援団

○…中山広明氏（中山紀子さんの夫君）が第一ダブルスで、コール・アンパイアとして登場（11日）。マイクを片手に「どうぞお静かに。試合の邪魔になりますから…」と再三の呼びかけ。これに対して二階席から、「ワカリマシタ」と、カタコトまじりの日本語で叫ぶのはいいが、そのあと「アハハ、アハハ」とバカにしたような笑い声。人も知るインドネシアの応援団。

留学生が多いだけに日本語もなかなかにお達者なのだがいかんせん情熱のお国のお人柄からか、自国のチャンスには、熱狂的な声援。十年前には同じ東京体育館でトマス杯（男子選手権）が行なわれ、大乱闘になった実績?を持つだけに協会関係者もハラハラだった。

（日刊スポーツ）

カアルトン ニュートーナメント は水鳥？

ナイロンを感じさせないナイロン。

新開発された、カアルトン〝ニュートーナメント〟シャトルは、ナイロンと云うよりも英国製高級水鳥シャトルに最も類似した性能を備えた、新しいシャトルです。



ニュートーナメントの特徴

●打球音が変った●ラケットから離れる感じが変った●ネットでのターンノーバ（回転）が変った●スピン●シャトルに対する視覚度（よく見える）がよくなった●飛翔のときの一貫した安定性が増加された。

メトロレジャー株式会社

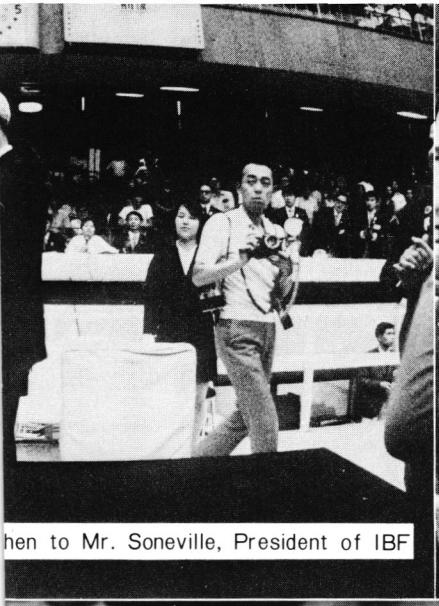
東京都千代田区外神田5-6-4 TEL. 833-3661（代）

栄冠、涙あり

第6回ユーバー杯女子世界選手権大会



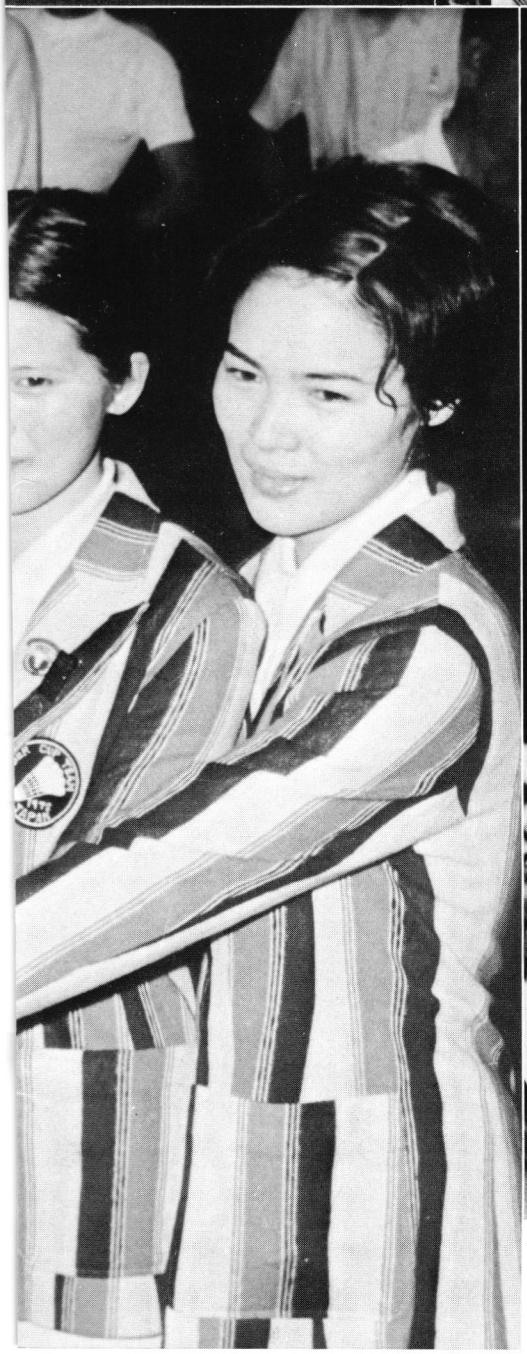
Japan's captain Mrs. Nakayama Kisses the Uber Cup with tears, after gaining the world title for the 3rd time.

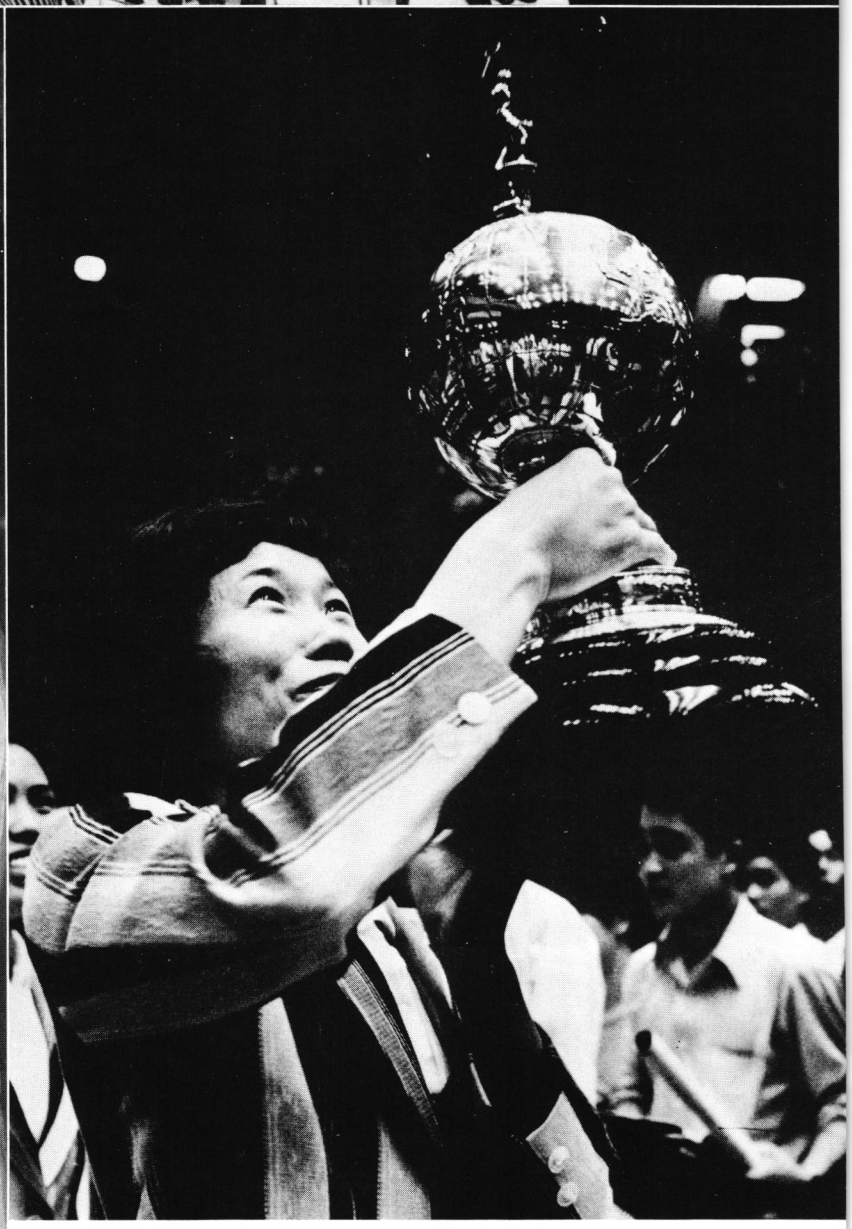


hen to Mr. Soneville, President of IBF

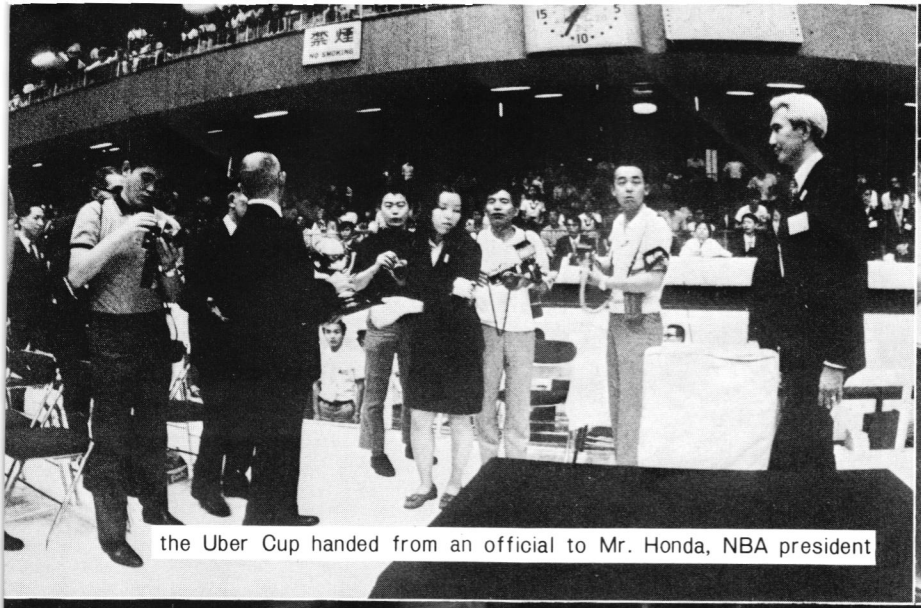


then to Japan's captain Mrs. Nakayama





晴れのカップは係り(陣内選手)から本田会長、本田会長からソネビルIBF会長、そして中山主将に手渡された(上段左から)



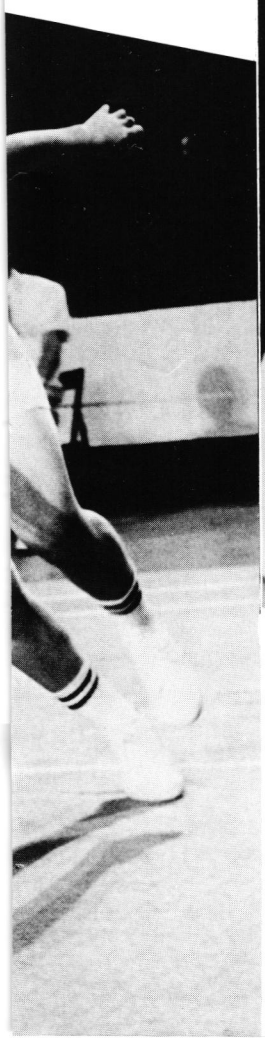
the Uber Cup handed from an official to Mr. Honda, NBA president



ユ杯はこうして全員の手に——この瞬間、次回への戦いは始まった

L. to R. Miss Shibayama, Mrs. Nakayama, Miss Yuki, Miss Takasaka, Miss Aizawa, and Miss Takenaka



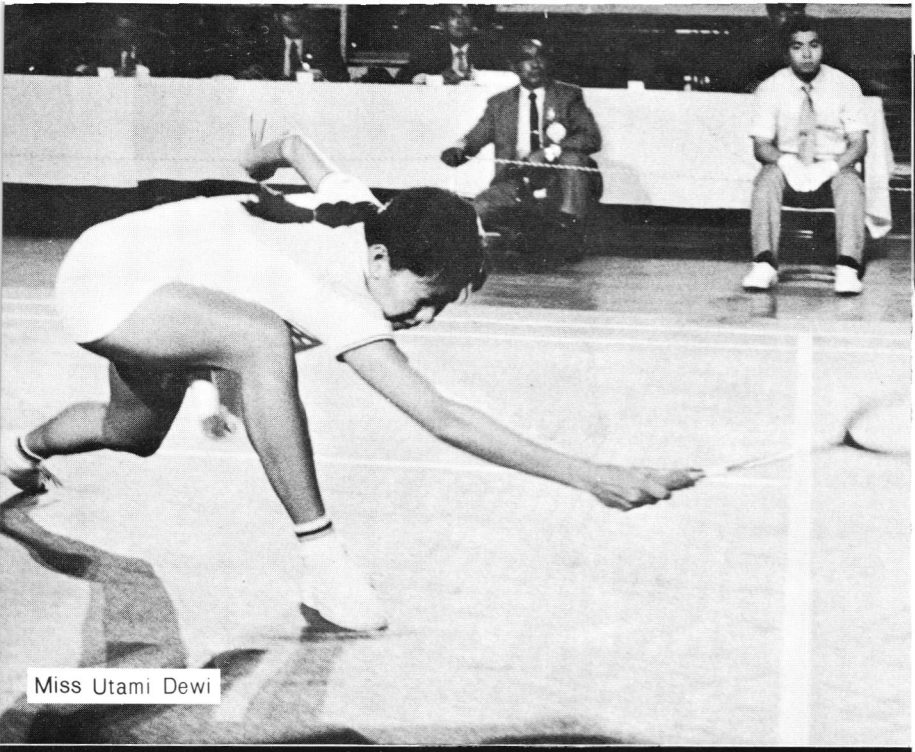




Miss Intan

Fighting spirit of Indonesia

—the toughest challenger against Japan—



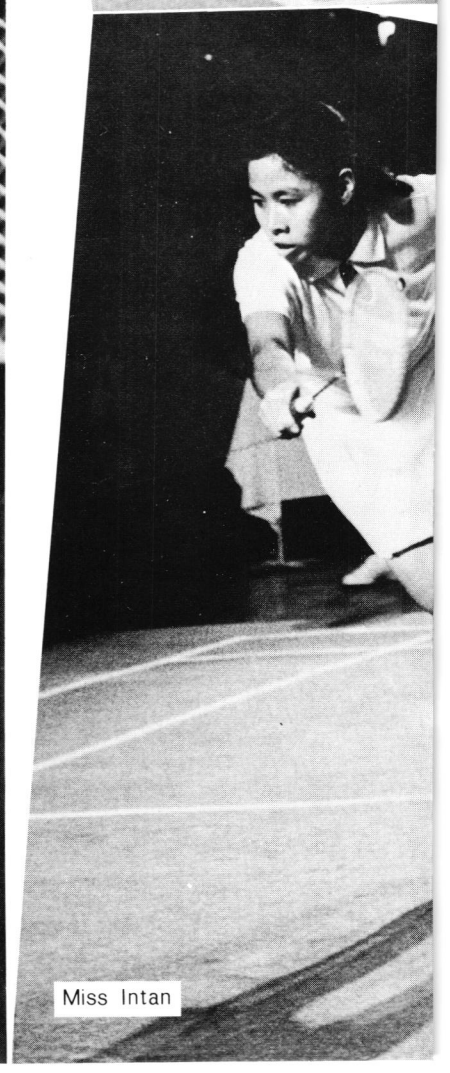
Miss Utami Dewi



Miss Regina



Miss Taty

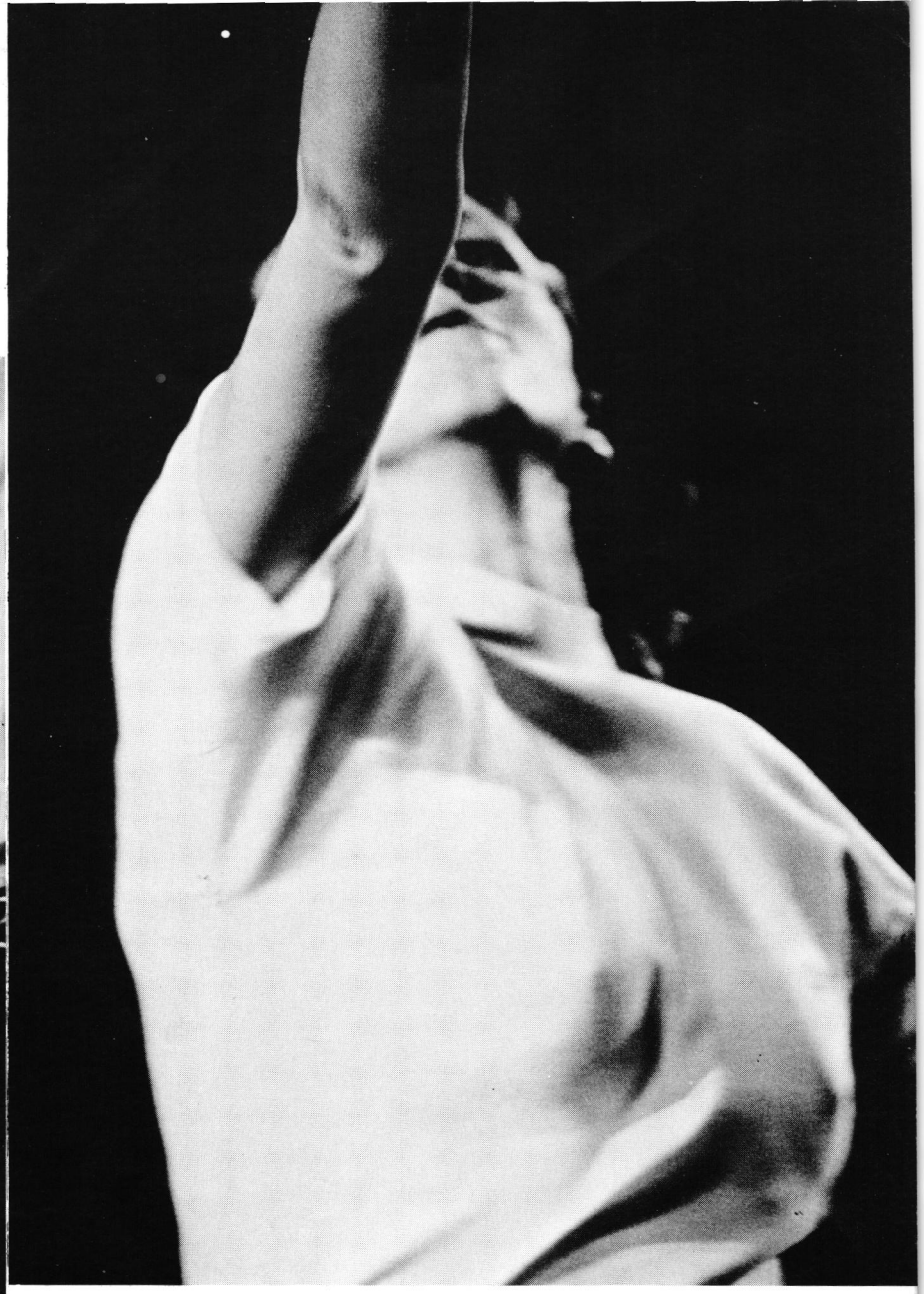


Miss Intan

your

n please!!

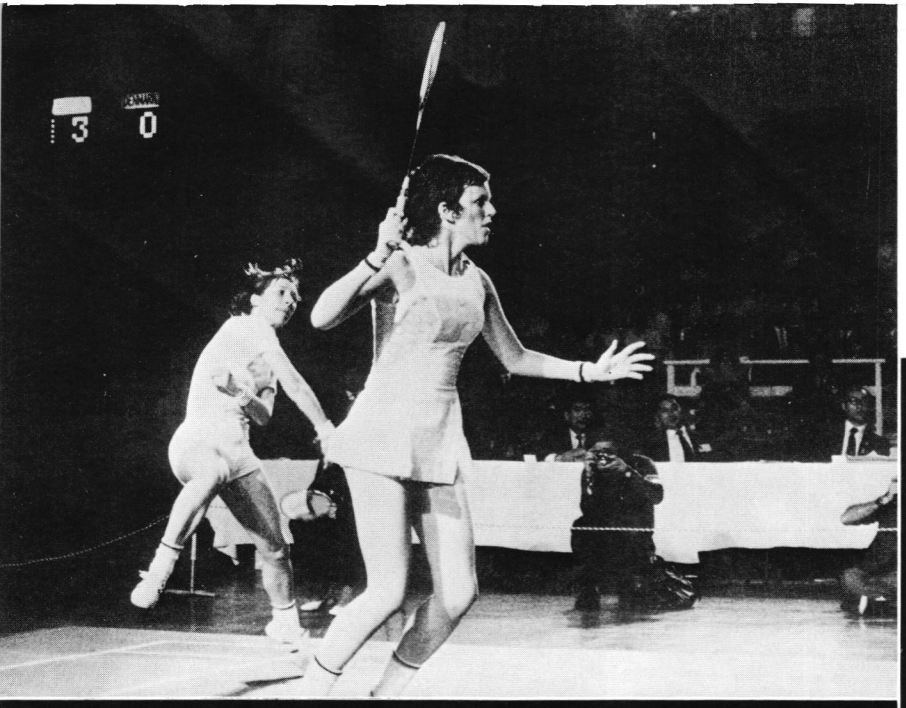




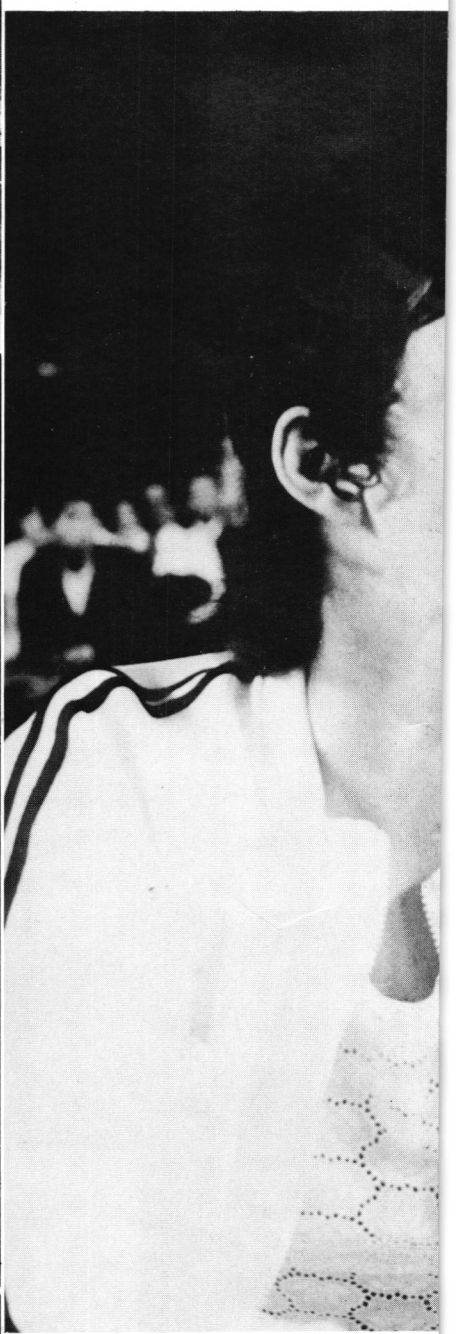
Mrs. Kaagaard of Denmark

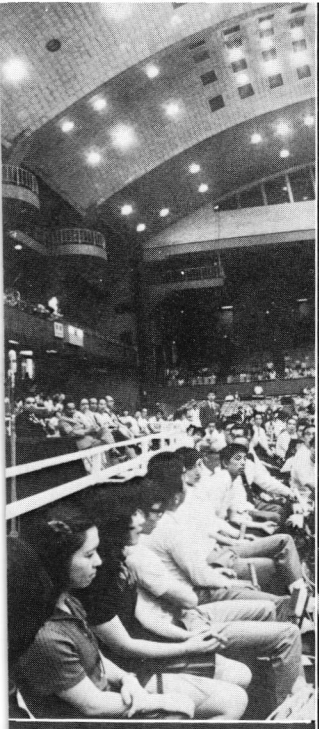
—the lady who attracted the attention
of capacity crowd on the court—

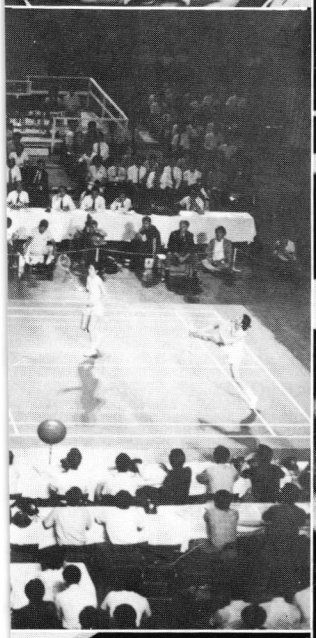
May I have
attenti















Her Royal Highness Princess Michiko (center) with her Prince Hironomiya (left) and Princess Chichibu (right)

Inside and Outside the court

―コートの内外で―



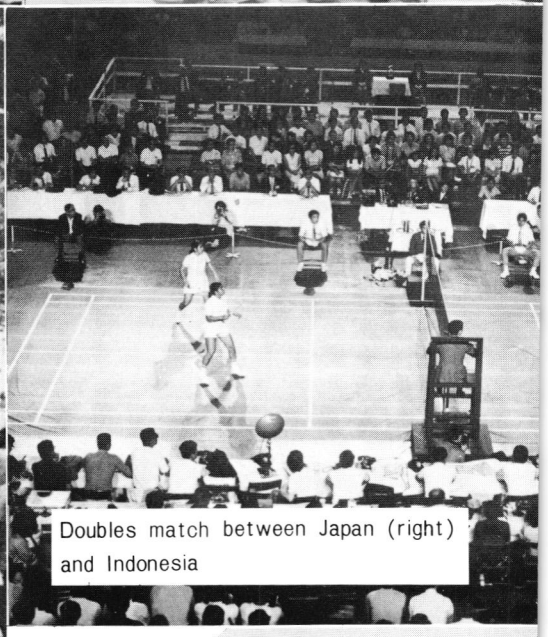
closing ceremony



IBF president Mr. Sonevill's address



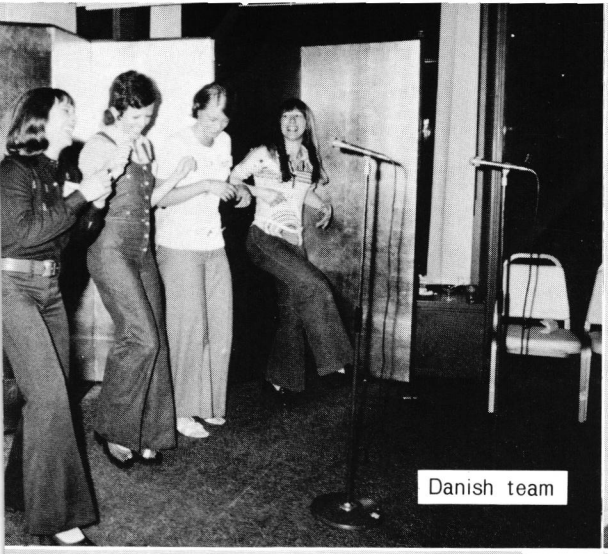
More than 10 thousand people waiting for the gate open on the final day.



Doubles match between Japan (right) and Indonesia



leaflet and poster, magazines were almost sold out

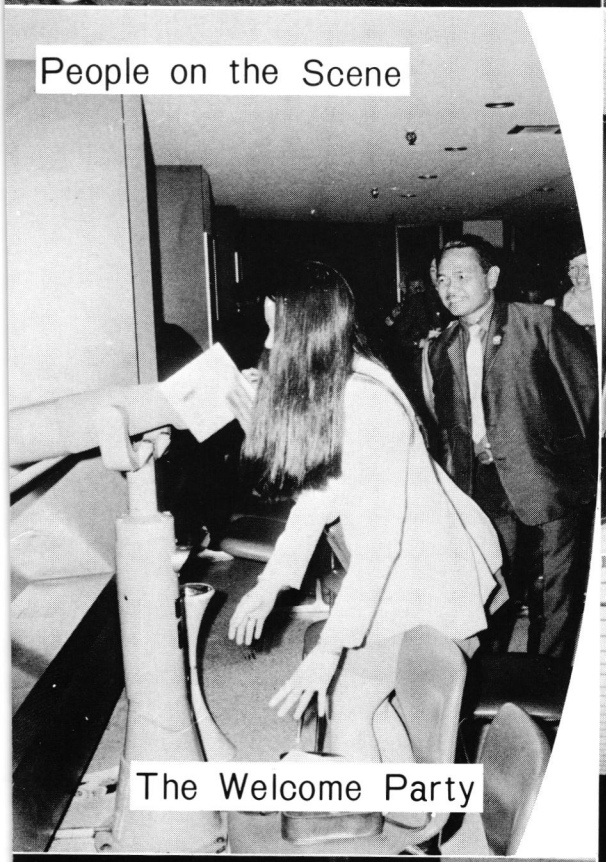


Danish team



New Zealand team

People on the Scene





Indonesia team

The Welcome Party





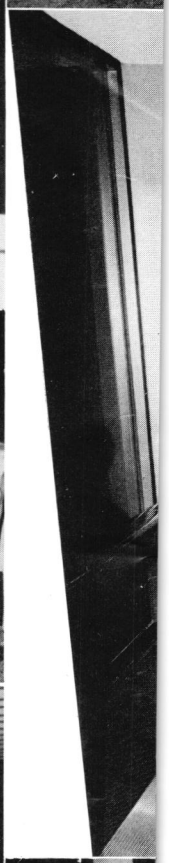


Japanese team on stage



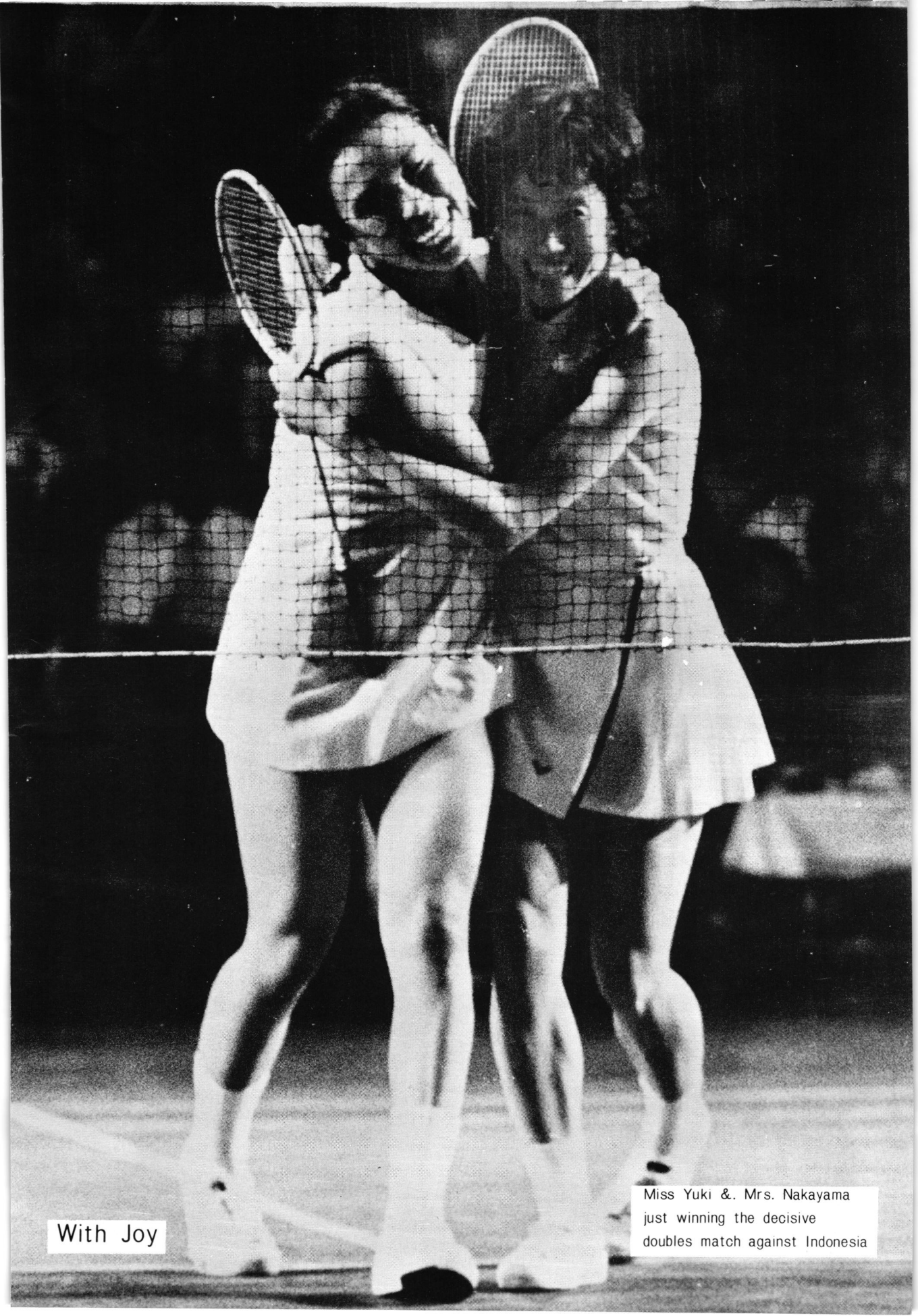










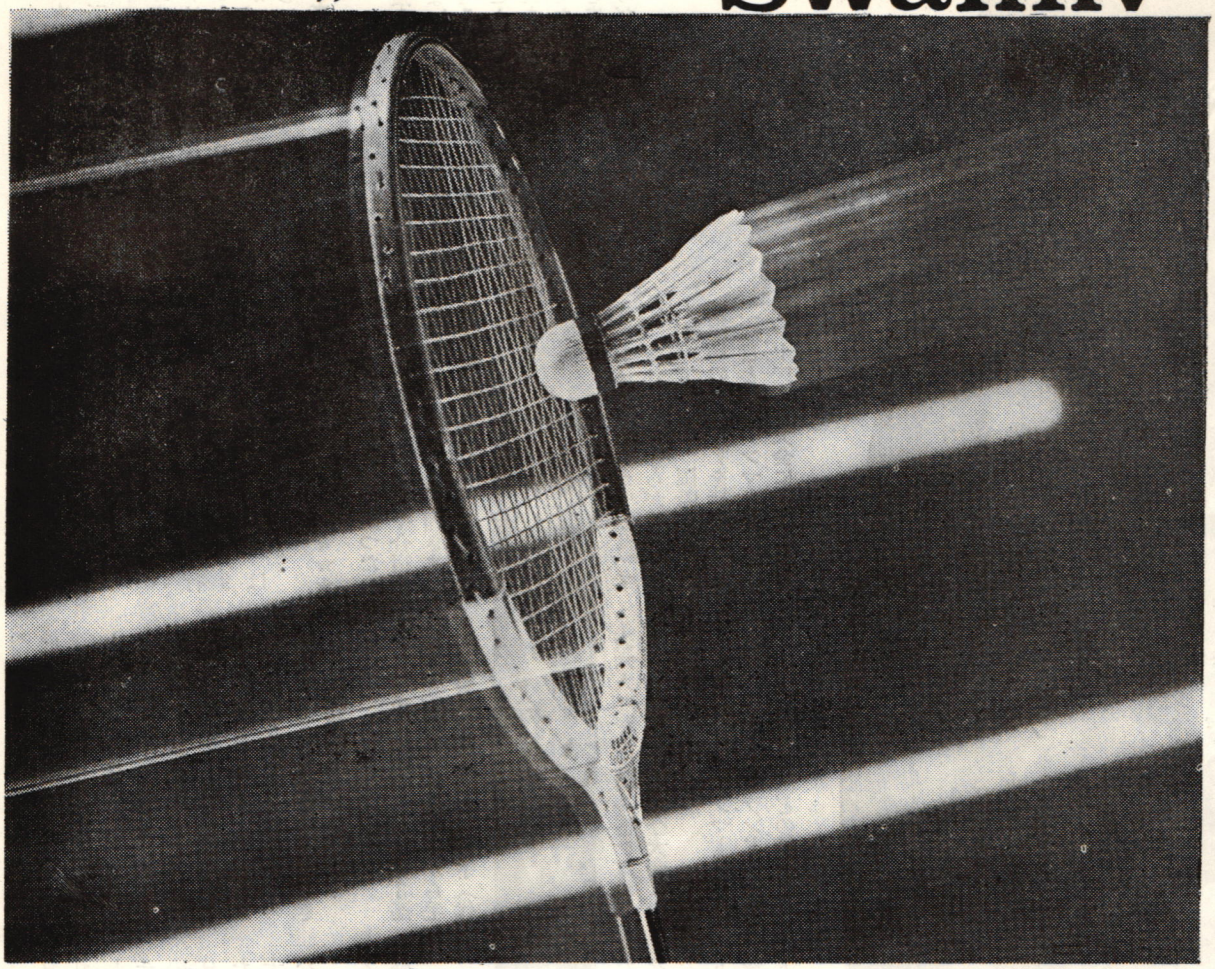


With Joy

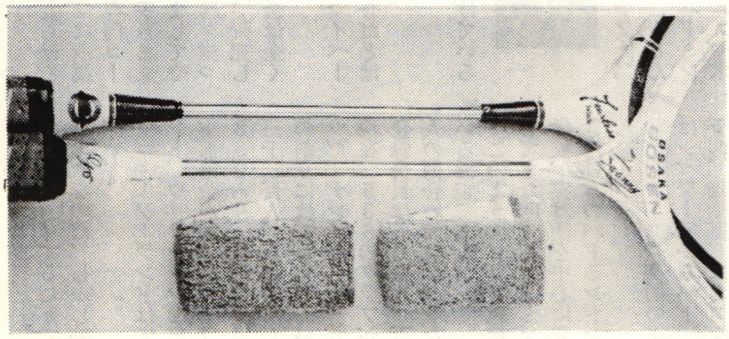
Miss Yuki &. Mrs. Nakayama just winning the decisive doubles match against Indonesia

《新発売》

Swannv



この確かなバイブレーション。
それはスワニー。



特殊合板の力強いフレームに、従来のものより長いステンレス・シャフトの強靭性が強力なバイブレーションを生み、重さも122g以下と今までより軽くなり、それがスピードとパワーの素晴しいバランスを構成し、ふりもシャープな一級品ラケットをつくりました。

No.ブ スワニー〈フレーム・カバー付〉 ¥3,800

☆お買い上げになりますとタオルグリップがついています。

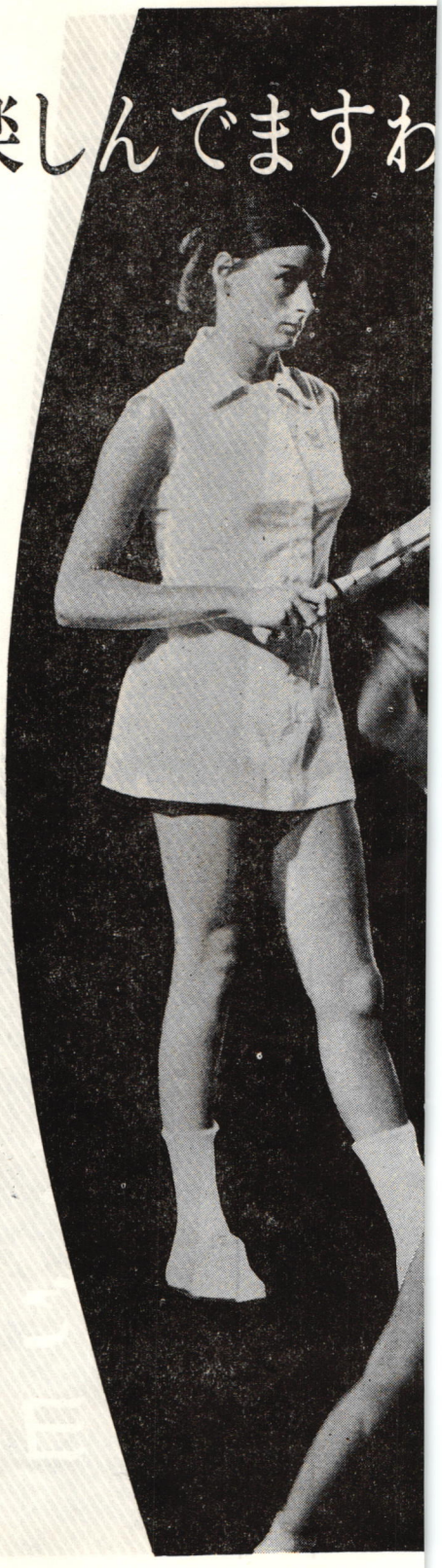
大阪合繊株式会社
本　社・大阪市東区豊後町4 ☎(06)942-5816 代
東京営業所・東京都台東区鳥越1-26-1 ☎(03)862-6576 代

バドミントン夫人



★★★

楽しんでますわ



用されている。

そんなせいかデンマークのコペンハーゲン・バドミントン・クラブでは、所属する会員約二百人のうちの半数以上はミセスで占められている。これを裏付けるように今回来日した欧米選手十六名の中の十一名までがミセスだった。

二歳の女児の母親であるストランド夫人は「自分の生活を楽しむのが第一。がむしゃらに練習する必要はないと思う。だから週末にはいつも夫と子供と三人でサマーハウスで静養したりバドミントンのために自分の生活を犠牲にはしません」とはっきりした意見を持っている。

どんな国際級の選手といえども、まず自分が楽しむための欧米バドミントン。

彼女らには、毎日が練習、練習の明け暮れで、気がついてみたら婚期を逸していたという日本によくある話は全くない。

「といって勝つ気がないんじゃありません。勝つために努力はするが、そこには絶えず楽しみがそなわっているということなんです」とルイア国際バドミントン連盟副会長。

それは勝ち負けを第一目標にして、勝ったことによってその競技がPRされて盛り上がり、ひいては底辺拡大につながるとする日本のスポーツ界一般の指導者の考え方とは、いささか異なる。大衆スポーツとしてのバドミントン。この強味がある限り、どんな選手権大会で負けても彼女らは動じないのである。

ニュージーランドのウォーラー夫人の場合

ニュージーランド・チームのグレニス・ウォーラー夫人がバドミントンを始めたのは13年前。両親が面白そうにシャトルを打つ姿がファンタスティックに感じられたから。

ジュニア・タイトルを3度獲得、一年半前に会計事務所に勤める夫君と結婚、今回は八人の間で行なわれたユ杯代表選手選考会をみごとにパスして、ニュージーランドの三選手とともに来日した。



――日本のバドミントン女性は結婚と同時に選手をやめて家庭にはいるのがほとんどだが。

「家庭の仕事が忙しいからだと思いますが、楽しむのなら続けられるはずです。私だって仕事（小学校の教師）が終わってバドミントン。帰ってきたらすぐにベッドです。それでもやるのは楽しいからですか。

――ご主人は理解がありますか。

「主人はウェリントン・ラグビー・チームのメンバーでスポーツは大好き。バドミントンも大好きですから理解してくれます」

――子供ができても続けますか。

「お産のため二年間ぐらいはやめて、手がかからないようになったらまた始めます。それからは、おばあさんになるまで。フッフッフ」

――プレーを続けるために子守りを雇うわけか。

「とんでもない。主人がラグビーをしているときは私が子守りをし、私がバドミントンの時は主人に見てもらいます。

――お金もかかると思うが

「年会費が三千円くらい。その他に毎回のコート借用料が一時間二百円。シャトルも一コ二～三百円ですから、雑費を含めて月一万五千円ぐらいです。

ニッポンは強すぎた

コートサイドの視角

語録

最もよいチームが決勝に残りそして優勝する――インドネシアのアブン団長

☆

オーダーが決まった以上、監督としては選手を信頼するしかない――日本の毛利監督

☆

きょうが四連覇への第一歩なんですよ――優勝直後、日本の堺コーチ

☆

今回は控えでしたが、次はぜひ出ます――ベンチをあたためた柴山選手

☆

中山さんがシングルスで長いラリーをしていたでしょう。あれを見て、ジーンときました。私が負けたのが本当に悪いと思ったのはあのとき

――高坂選手

☆

これでオリンピックに出られたら金メダルは間違いなくとれるのに――日本協会・川端理事長

☆

（欧米選手は）日本やインドネシアのように自分を痛めつけるまできびしいトレーニングをしていない――同

☆

とくに感想を述べるほどのゲームではありません――対デンマーク戦後、中山主将

☆

打てるときに力いっぱい打っておかないと、もっと強い力のシャトルが返ってくる――優勝後、中山主将

それにしても、これほど強弱の差の激しい世界選手権も珍らしかった。ママさんバレーの大会に日本リーグのユニチカ貝塚や日立武蔵が加わったような具合だった。勝敗を争うには力がかけ離れていた。（スポーツニッポン＝谷上寛太郎記者）

特訓の成果

インドネシアのスタンリー監督は、お手上げの表情だった。「うちの出来は最高だった。だが、それよりも、日本が強すぎた。主将のナカヤマは、インドネシアの至宝ハルトノ（全英選手権5連覇）を女にしたような世界のNO1選手。敬意を表するしか、しかたがない」。打倒日本に三年の歳月を費してきた監督は、あきらめに似たことばさえ、もらした。

日本が〝世界の女王〟の座を占めているのは、バドミントンのほか卓球、ソフトボールがあるが、五月の日中親善試合で全敗した卓球にくらべ、バドミントンはいぜん強い。個人の世界選手権といえる春の全英選手権で、シングルスに中山、ダブルスに相沢・竹中の両チャンピオンを出し、団体のユーバー杯は3連覇だ。

日本が強いのはなぜか。その答えははっきりしている。欧米諸国がレジャーをふくめたクラブ中心でやっているのに、日本は学校中心に選手を強化。しかも合宿で、みっちりハードトレーニングをつんでいるからだ。このユーバー杯でも強化合宿は七回、計六十日に及んだ。

（サンケイ新聞　木村照夫記者）

この余裕

赤、黄、青、ハデなストライプのブレザーを着込んだ日本の選手たちが、試合の三十分前だというのに、ゾロゾロ体育館から出ていった。いったいどこに行くのかと思ったら、なんと体育館前のアーチの下で、そろって記念撮影ときた。これを見たファンの一人「さすがはチャンピオン、試合前にこういうのは済ましておくんだなあ」と、たのもしそうに見守っていた。

「実はまだ、ブレザー・スタイルで、そろってとったことがないんですよ」と毛利監督は説明していたが〝楽勝ムード〟いっぱいだったことはたしかだ。

（サンケイスポーツ　今村忠記者）



この余裕。休けいの合い間に気がるにサインに応ずる。

＝すがすがしい栄冠＝

“マイナー”に訪れた力強い夜明け

ズバリ大当り

――各記者の予想アンケート――

以下は大会プログラム用に協会が各記者に求めたアンケート「最も活躍を期待される選手」結果はズバリでした。

木村（サンケイ）中山紀子。ユ杯3連続出場のキャリアと老練な試合運びは抜群。全英、全日本などのチャンピオンであるばかりか技術的、精神的にも安定している。

小林（読売）しいてあげるならば中山選手となろう。

後藤（東京）中山紀子。別の意味では高坂薫。彼女の試合タイプは外国選手にとまどいを与えそう。ユニークな存在だ。

鈴木（毎日）中山紀子。女子選手は結婚後は落ち目になることが多い。にもかかわらず逆に国勢より強いのでは…」というが、それなら他の競技団体も強くなければおかしい。

マイナー・スポーツの地位に甘んじながら、この強さを維持するのは並み大抵のことではなかったはず。それを口にしないところに、この優勝が一段とすがすがしく映った。（**デイリースポーツ**＝**勝木記者**）

彼女は益々よくなってきている

瀬下（朝日）中山紀子、相沢マチ子、竹中悦子。中山についてはいまさら、いうまでもないフレッシュペアについては活躍というよりも、活躍して欲しいという願望も含まれる。

竹市（共同）中山紀子と湯木博江。中山はスタミナ不足は否めないがキャリアを買う。それが大事な場面で支えとなりヒロインになりそう。また湯木は当りはずれが多いが、当ったときは抜群。

盛川（日刊）中山紀子、豊富なキャリアと実績を買う。

若松（東京12）日本が勝つためにも相沢、竹中の活躍が必要。また活躍してもらいたい。

コートサイドの視角

三連覇を日本の大躍進につなげよう

ユーバー杯三連覇、本当におめでとうございます。私は開会式から決勝まで、すべて観戦しましたが、待ちに待った開会式が始まり、日本選手団が入場してきて、29歳という年齢にもかかわらず三度、連続出場の中山選手や、足の負傷をみごと克服した竹中選手、そして、この日のために練習を積んできたユ杯日本チーム全員の姿を見たときは非常に感激的な気分でした。

しかし、インドネシア×カナダ戦が始まると、そんな気分もふっとんでしまい試合に熱中して、選手の動きに見とれてしまいました。

そして決勝の日、試合開始の二時間以上も前に会場に行ったところ、なんともう、人の列がずらりと並んでいましたが、それでもどうにか良い席にすわり試合開始を待ちました。

第一シングルス、高坂選手が惜しくも敗れ、完勝をのがしましたが、優勝し、中山・湯木選手が抱き合って喜んだ瞬間に、私もコートにとび出していき、手をとり合って、おめでとうと叫びたい気持ちでした。と同時になぜ、こんな素晴らしいスポーツが、いまだに多くの人々に理解されないのだろうと思わずにはいられませんでした。バドミントンは、まだ一般にはスポーツ競技としての真のすばらしさを理解している人は少ないと思います。

たとえば私は、このユ杯のあることを級友に知らせ、バドミントンのすばらしさを説明しましたが、ほとんどのものが西洋ハネツキ（頭にくることば）だとか、それほど運動量の多いスポーツではないだろう、などといって理解してくれません。

このように、愛好者以外の人々は、ほとんどバドミントンについて（その動きや特性など）は知らないと思います。ですから今後、バドミントンをますます発展させる意味においても、このユ杯三連覇の意義は大きいと思います。そして、これを好機に、今後国際試合やテレビ放映などもふやしてもらいたいと思います。そうすれば、しだいにスポーツとしてのよさを知ってくれる人々もふえるにちがいないと思います。

日バ協会の皆さん、今後もバドミントン発展のために、努力して下さるようお願いします。

（横浜市中区本牧元町83）

磯野広和

私は見たチームワークの美しさ

おめでとうございます。勝利のうちにも、いうべからざる苦労があって、そう簡単に勝った勝った、ではないでしょう。

高坂がベンチで迎えられたとき、なにか悲壮なものがあるのが常でしょう。しかし、ベンチでは、そんな気配はなかったようです。ことに貴兄（注、山本マネジャー）が高坂を迎えたあの笑顔は残念さがない。高坂もチームにとけこんでいる気持ちになったでしょう。

三連覇が決まったときの湯木は清潔な純真な笑顔でした。そして中山は家庭を持っている落ちついた笑いでした。これはチームワークが、勝つためというよりは、立派なチームであるこ

第6回ユーバー杯を勝ち得たことは、本当に偉大なことだと思います。が、同時に次回第7回の防衛も考えなければならないのではないでしょうか。

他国の参加選手には学生が現に出場しているにもかかわらず日本では、ほとんどが社会人で学生が姿を見せない。ということは私達学生陣が怠慢だからではないでしょうか。

トップレベルに追いつけ追い越せで食い下がり、なおかつ引きずり落とさなくては、いつまでたっても、ユーバー杯での学生の活躍を見ることはできないと思います。

たしかに、ユーバー杯ともなれば技術や体力の面でもすぐれていなければならないけれど、技術的なものよりも、もっと精神面ですぐれた選手も要求されると思います。それだけに、大きな舞台を踏んで経験なさってきた方たちが代表の座を占めて

奮起しよう学生陣

日体大　陣内裕子

いて、学生たちのはいり込むスキがないのかもしれません。

自分自身とても情けないと思ってペンを握っています。

このユーバー杯で、一番、苦しまれたのは、なんといっても監督、コーチ、選手の皆さまだと思います。ユーバー杯の防衛については、報道では、確実、確実と騒がれ、関係者外から見れば、たやすいことのように思われがちであったのでは？

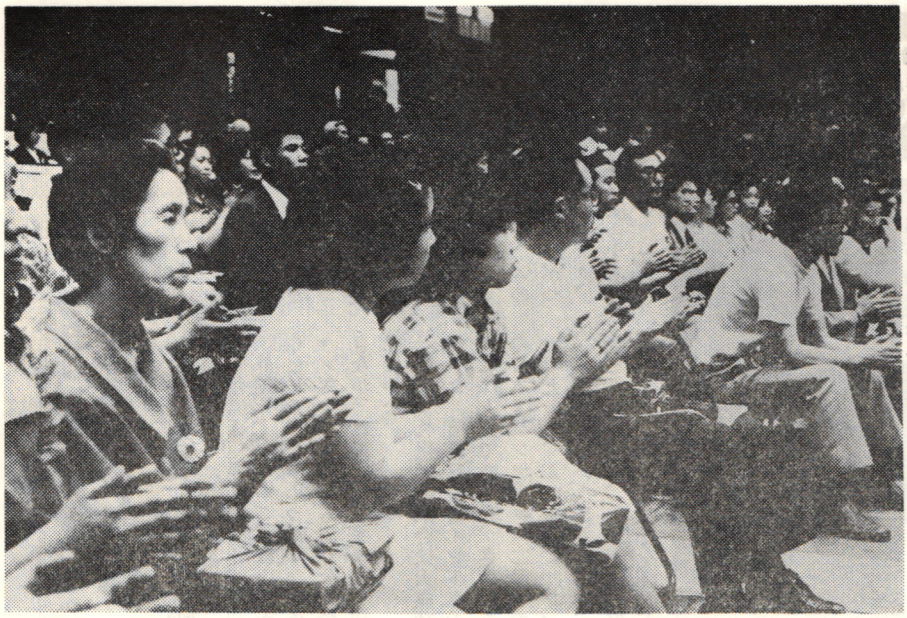
私も強化合宿に一、二回ほど参加させていただいたとき、思ったのですが、そういう期待や信頼が、選手の自信や励みになる反面、このことが一番、重荷じゃなかったのかしら。

しかし、この〝重さ〟が今回のユーバー杯の精神面での力強さに反動となって現われ、防衛をなしとげたのだと思います。

（注）陣内さんは大会中、役員として、貴賓席に飾られたユーバー杯の警備にあたった。

とを表明しています。

なんでも勝てばいいというのでなし、しかし中山が前に出て拾いまくった。あの自分を忘れた心情、あれはチームワークの要素であると思います。



満員のスタンド　絶えまない拍手の波

みんな仲よくして気が合ってというチームワークは、中山のあの拾いまくるものが要因ですと負けん気で、がまんがまんで食いしばるでは勝ってもチームワークのよさが、発揮できませんん。おめでとうございます。いよいよ内助の功豊かに、どこまでも表面でなく、内面的に。

大変えらそうなことをいって申しわけありません。日本人がそのよさを発揮するのは、実力があって精神修養が出来ていることと思います。将来を楽しみに、万歳を申し上げます。

（注）野瀬氏は日本聖公会主教、日本チーム山本マネジャーの洗礼牧師。この手紙は山本マネにあてて書かれたもの。

（野瀬秀敏）

大会やぶにらみ——反省材料のかずかず

第6回ユーバー杯を拝見させていただきました。日本の3連勝、観客も集まり、バドのPRにもなり、成功裏に終わったように思えます。しかし私の感じた点がいくつかあります。

◎席について　S、A、Bと3種類ありました。しかし私の感じではA席の南北、それも、その真ん中が一番よい席だったように思いました。実際、私は一、二、三日目はA席で、四日目はS席で見ていたので、特にそう思います。また、このS席ですが、特設したというのはどういったものでしょうか。

確かにより多くの人を入れたいということもあるでしょうがむしろS席の所に委員の席を置き、本部はもっと下げた方がよかったように思います。というのも、本部席に前でコート近くにあるため、A席からはサイドラインのあたりが見えなくなっているのです。

◎取材について　カメラマンとしては近くから良い写真を、という気持ちはあるでしょうが、それにしても本部の前、コートのすぐ近くまで行くというのは考えものではないでしょうか。それはまだしも、腹が立ったのは国歌演奏で国旗の方を向いている選手を、クッのままコートの中にはいり、選手のそばまで行って写真をとっているカメラマンがいたことです。カメラマンには特権が与えられているのでしょうか。

◎入場当日売りについて　特に決勝戦当日は予想通りの人出でした。ところが観客が勝手に並んだため、列が蛇行して、入場者と当日売りの買い手がどう分れているのか、最後尾がどこなのかわからず苦労しました。もう少し協会に手段があってもよかったと思います。前売り券のPRもあまりなされていなかったように思うのですが。

◎観客について　とくに印象に残っているのはインドネシア×ニュージーランド戦のときのことです。一方的な試合で退屈だったかもしれません。それにしても3階で数人の男女が何度となくふざけあって、かなり大きな笑い声を立てていたのはエチケットに反すること、はなはだしいと思われます。どの競技でも日本の観客マナーはよいとはいえない。しかしバドミントンこそは、のつもりで協会も対策を立ててほしかった、と思います。

◎選手紹介について　日本語、英語の2本立てで行なわれていましたが、私には名前だけで、経歴についての紹介は不用と思われました。試合開始の準備ができてからもなお、英語版が続いており、会場はシラけた空気がありました。経歴についてはプログラム等も売っています。親切も度がすぎては、ありがた迷惑です。

最後に席のことで書き忘れましたが、一つも座席（個々の）指定がありませんでした。S席ぐらいはあってもよかったのではないでしょうか。（仙台市向山2丁目16—13、大友方）

高木　淳

〝次回〟へGO!!

柴山大活躍

スタンドも満員　成功した札幌シリーズ

ユーバー杯大会終了後、日本はデンマーク、インドネシアと札幌・中島スポーツセンターで〝三国対抗〟と銘打った国際親善試合を公開した。

大会後のエキシビションについては、事前に全国の各協会の希望を集め、また参加各国とも打ち合わせたが、外国チームの日程等のつごうで折り合いがつかず結局、札幌でデンマーク、インドネシアだけが試合することに落ち着いた。

外国チームのつごうはともかくとして、このめったにないチャンスを、地方にも広く公開できなかったことは、まったく残念だった。

さて、札幌での試合は大成功だった。第二日の対インドネシア戦は人波であふれ、さきごろの日本×デンマーク（二月）の大阪といい、よい試合にはファンが集まるということ、また、見てもらうには、それだけの努力が大切、ということを証拠だてた。

大試合のあとは気がゆるむものだが、日本は王者の貫録充分に、実力を出し切った。〝本番〟でベンチをあたためた柴山がニールセン（デンマーク）に圧勝さらにインドネシアの新人テオドラをも一蹴したことは、三年後の布石として、心強いかぎり。対インドネシア戦に地元のNO1田村静子（地崎組）が出場したのもいい経験だった。

三国対抗見たまま

『いやあ、はいったなあ』スタンドを見上げて、道協会の役員が思わず嘆声をあげた。初日は雨にたたられて千五百人余りの入りだったが、二日目はざっと見渡しても確実に三千人のファンがつめかけていた。

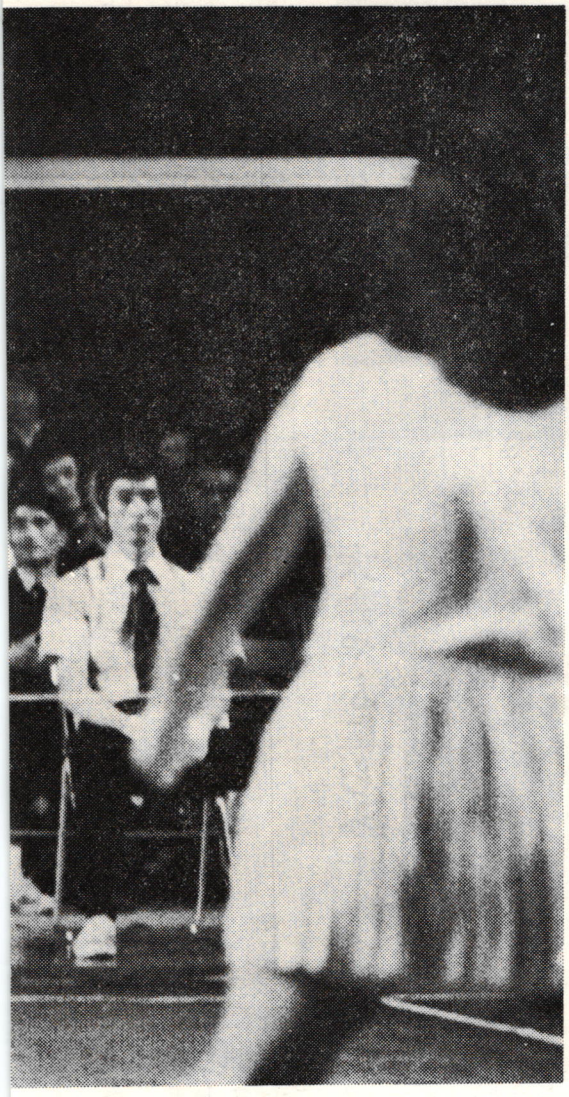
バドミントンは、北海道にとって、かつては全国的にも高いレベルにあった伝統がある。そして、競技者層も、今は強かった時代よりふえている。それでも、バドミントンの試合で、これだけの観客が動員されたことはなかった。まさに、〝有史以来〟の入りだった。

もっとも、この三国対抗を計画した当初、道協会は役員も一日千円の入場券を買って入ることを決めたほど、観客動員に力をつくした。北海道は近くなった、といっても三カ国の役員選手二十人余りの飛行機代に宿泊費などバカにならぬ金額になる人がはいらなければ、すぐ百万単位の赤字になるのだから、ただでさえ金のない協会が独自で〝興行〟を持つのは、簡単にできることではない。どうやら採算点ギリギリの五千人近い入場者で関係者はホッとひと息。

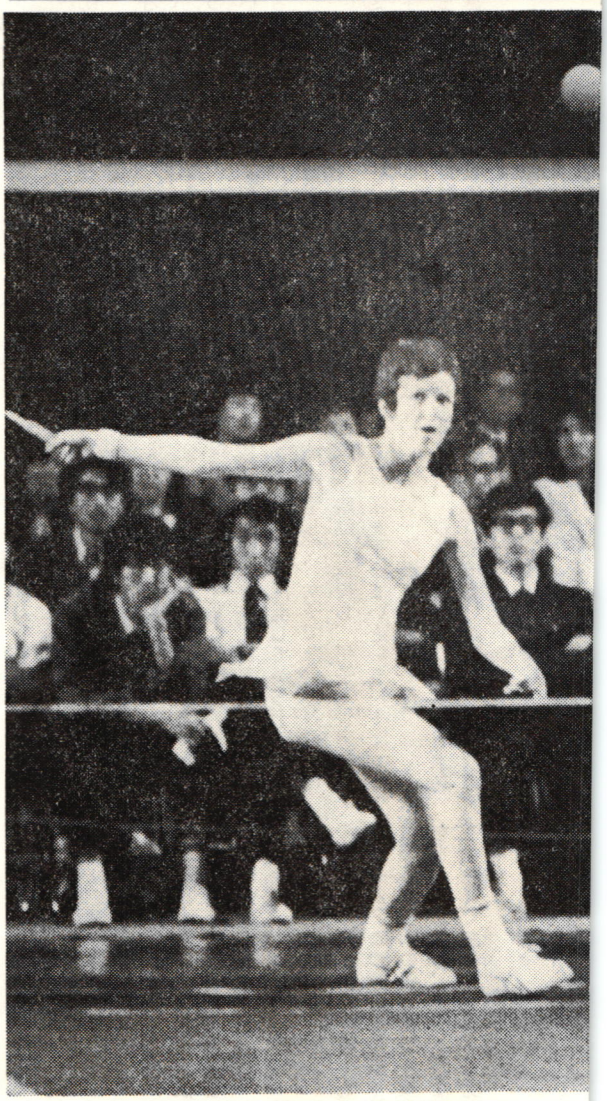
この熱心なファンは、はっきりいって〝ユーバー杯三連覇の日本チームの魅力〟もさることながら、それ以上に、〝切符を売り歩いた役員のアセと努力〟のせいだったように思えた。

それはとにかく、二日間にわたって行なわれた三国の選手たちの妙技に、そしてデンマークの選手が見せてくれた派手なコスチュームに、ファンは大いに満足し、この北海道大会は大成

親善試合も圧勝



日本王者の貫録，



人気のマトだったカガード選手

The post-Uber Cup International Friendly Meet (at Sapporo City)

◇1st day, June 13.

Japan	5 — 0	Denmark
Yuki	(11 — 7, 11 — 3)	Kaagaard
Shibayama	(11 — 5, 11 — 3)	Nielsen
Nakayama Yuki	(9 — 15, 18 — 13, 15 — 6)	Kaagaard Flindt
Aizawa Takenaka	(15 — 8, 15 — 4)	Strand K. Jorgensen
Takasaka	(11 — 1, 11 — 1)	A. Jorgensen

◇2nd day, June 14.

Japan	4 — 1	Indonesia
Nakayama	(11 — 0, 11 — 0)	Utami
Shibayama	(11 — 8, 11 — 0)	Theodora
Tamura	(1 — 11, 1 — 11)	Taty
Aizawa Takenaka	(18 — 13, 15 — 11)	Intan Regina
Nakayama Yuki	(15 — 1, 15 — 8)	Retno Theodora

功だった。そして、なによりもよかったのは、北海道ナンバー1の田村選手が、なんのなすすべもなく、インドネシアの若手選手にひねられたことだった。

田村選手には気の毒だったが『もっと善戦』を信じきっていた道協会のコーチや男子を含めた選手たちに、〝井の中のカワズ〟ぶりをはっきり自覚させたはずで、この現実を直視してこそ、北海道のバドミントンがかつての栄光を取り戻すきっかけがつかめるはずだ。

ところで気になったことをひとつ。ママさんバドミントン教室の奥さんたちも多く見に来ていたが『日本の選手たちはどうしてユニホームをそろえないのかしら』と素朴な疑問を投げかけていた。

デンマークもインドネシアもたしかにショートパンツあり、スコートあり、ワンピースありで、統一していなかったが日本選手団の場合、目ざわりだったのは胸の小さな日の丸のすぐ上や下にあるメーカーのマーク。

なにも知らない人は協会のマークくらいに思っていたのだろうが、初めに出て来た選手がA社のマークで、つぎに出て来た選手はB社のマークとかわって『アレッ』と気がつく。せめて業者のマークだけでもとれないものか。といってもコーチも選手もメーカー所属とあっては、ブランデージならずともなにか感じないだろうか。

つい数カ月前に冬季オリンピックを開き、そのあとも日ソ・バレー、日チェコ・バスケットと相ついで、札幌市民は国際試合に目がこえている。しかもオリンピックではスキーの商標問題が大きくとりあげられ、ゴールインした選手が、競技役員の手ですぐスキーを目にふれぬよう運び去る風景を見て来ている。

そうした市民の目がこんな細かい所にも気づくようになっている。全日本チームは実業団大会の1チームじゃない。業者と協会の変な癒着をしめすものでないなら幸いだけれど…。

北海道新聞運動部
下山 周作

中学生大会使用球の再考を

亀戸中教諭　伊藤　澄

中学生全国大会が近づいた。昨年から始ったこの大会は次代を背負う中学生プレーヤーに大きな希望とはげみを与えたが、同時にスタートから使用シャトルの問題で論議を呼んだ。日本協会の総会でも二年越し、白熱の論議が戦わされているほど。

このときにあたり、東京・亀戸中の伊藤先生から、ぜひ「バドミントン界」に載せてほしいと、使用シャトルについての一文が投稿されてきた。先生は前文の中で、日本協会にも同文のコピーを送ったことを明らかにし「全国関係者の反響を聞きたい」と述べている。

すでに今年の大会（名古屋）では陸鳥球を使用することに決まっているが、全国の中学校でふだん練習に使っているシャトルは合成、陸鳥、水鳥入り乱れており、統一しにくいのが現状である。

ここに紹介する伊藤先生の説が正しいかどうかは別としてもこれが、中学生のバドミントン普及、指導について、関係者がもう一度、考えるきっかけになれば幸いである。

拝啓　日本バドミントン協会殿

全国中学生バドミントン大会使用シャトル決定の際に考慮していただきたい事項

私は中学校でクラブ活動を通して、バドミントンを教え、中学生とともに競技としてのバドミントンを愛し、楽しんでいる一教師として、昨年から始められた全国大会には大賛成です。

やはり、バドミントンをやっているからには、試合をやってみたくなり、校内だけではあきたらず、できるだけ大きな大会へと目が向けられていくのは当然かとも思われます。

それが中学生に許される最大の範囲の全国大会にまで拡大されたわけですから、うれしくないはずがありません。この大会に尽力された関係各位のご努力には絶大なる敬意を表します。

だが、実施された第一回大会から重大な問題をひとつかかえ込んでしまいました。それが大会使用シャトルの問題です。

シャトルに関するルールには競技規則第四条に

○材質、重さ、寸法および形状が規定され

○速調（ペース）が決められています。

大会運営規定第50条には

○大会使用シャトルは検定合格球であることが必要であると記されています。

ところが、日本教職員バドミントン連盟審判部監修バドミントン・ハンドブック第一編、競技規則一〇〇問集・問32によれば、国際規則には「材質や寸法が規格通りでなくても、全体の形がシャトル特有のデザインで重量が規格に合っており、速調が正しければ…」と記されているそうです。

そこで、第一回大会に使用された陸鳥球と称されるものは、確かに規則第四条、大会運営規定第50条の二つの条件を満たすシャトルであること、また現在の日本バドミントンを世界の一流国にのし上げた歴史的功績もまた認めます。

普及発展の段階から世界的に飛躍するために水鳥球（ガチョウの羽根）に変えざるを得なかったのも、また、歴史的事実かと思われます。事実、水鳥球が検定会に出現してから十年を見ずして、女子では世界NO1の地位を獲得し、男子も世界の五指を下るまいというバドミントン一流国になりました。

これは水鳥球の功績――水鳥球の使用が打法にも試合の進め方にも大きな進歩をもたらした結果かと思われます。

確かに陸鳥球はルール上の条件を満たし、打った感じ（ただし、我々だけですが…）は水鳥球そっくりです。だが、ここで見落してならない重大な欠点があります。それはシャトルのとび方です。

水鳥球は自分に向かって飛んでくるシャトルは左に曲がります。陸鳥球は逆に右に曲がります。この一点だけでも、次代を担う中学生にはマイナスにこそなれ、プラスにはならないと思います。

この全国大会の目的は底辺拡大もそうですが、技術的底辺拡大にあったのではないでしょうか。だとすれば、フォームの基礎固めの段階の中学生に、からだから打点を離すことを余儀なくさせる打法の改悪以外、なんでもないと思われます。

最後に、このような性質の陸鳥球に、なぜ協会が固執されるのか、その意図がさっぱりわかりません。この陸鳥球の根本的欠陥が、日本の優秀な製作技術をもってしても、解決不能な原毛の性質であるとすれば、現在のままの陸鳥球の大会使用には賛成しかねます。

これらのことを考えると、現在のままでの陸鳥球を使用する大会には、たとえそれが権威ある全国大会でも、私自身は参加したくありません。

ただ、ひたすらあこがれの全国大会めざして精進している中学生の純真な望みを考えると、考えてはならないなにか裏がありそうだ、などというバカげた考えまで頭に浮かんできます。あくまでも中学生には水鳥球に移行する前の一過程として、理にかなった正しいフォームでバドミントンをやってほしいと願うからです。

以上のことから、中学生の全国大会には、合成シャトルの使用を、認めていただきたいのです。事実、第一回大会のアンケート調査の結果、半数以上の県が合成シャトルを使用しているということを、洩れ聞いています。そのためには大会運営規定第50条の改訂が必要ですし、この改訂が間に合わなければ、水鳥球を使用していただきたいのです。

ぜひ、賢明なる協会の処置を要望してやみません。

（伊藤先生の連絡さきは東京都江東区亀戸町七の二六九、江東区立亀戸中学校内）

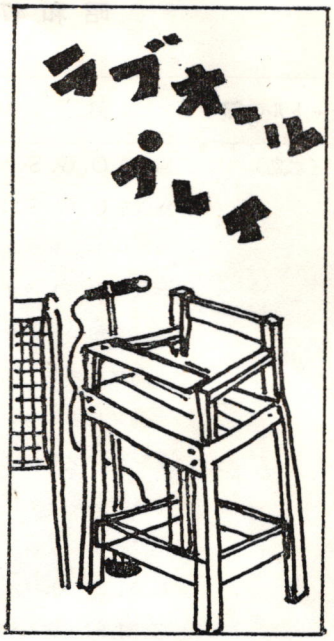
昭和47年度用具検定会合格用具

日本バドミントン協会用具委員会

シャトルの部	銘柄名	会社名	予定小売価格
（水鳥）	№200 O. G. S. ゴールド	大阪合繊株式会社	1,900円
	№205 O. G. S. シルバー	大阪合繊株式会社	1,750
	エリート　デラックス	河崎ラケット工業株式会社	2,300
	エリート　トップ	河崎ラケット工業株式会社	1,950
	サンワ印　ハイレッド	株式会社　三和	1,900
	水鳥ファスト　ゴールド	有限会社　ジャワ商会	1,800
	水鳥ファスト　シルバー	有限会社　ジャワ商会	1,650
	トーナメント　ブラック	株式会社　トヨダスポーツ	1,800
	トーナメント　ブルー	株式会社　トヨダスポーツ	2,000
	ホワイトジェム	株式会社　トヨダスポーツ	2,250
	C. M. 印　ホワイトウイン	日本バドミントンインダストリ株式会社	1,700
	C. M. 印　シルバーブルー	日本バドミントンインダストリ株式会社	1,500
	C. M. 印　ゴールドブルー	日本バドミントンインダストリ株式会社	1,300
	ハタチ・ビクトリー	羽立工業株式会社	2,400
	水鳥サンバタ　スター	株式会社　諸江製作所	2,300
	水鳥サンバタ　キング	株式会社　諸江製作所	1,950
	水鳥サンバタ　クィーン	株式会社　諸江製作所	1,800
	トーナメント　デラックス	株式会社　ヨネヤマラケット	2,300
	トーナメント	株式会社　ヨネヤマラケット	1,950
（陸鳥）	陸鳥ファスト検定球	有限会社　ジャワ商会	1,100円
	陸鳥ハタチトーナメント	羽立工業株式会社	1,800
	陸鳥サンバタ	株式会社　諸江製作所	1,150
	陸鳥サンバタ　B	株式会社　諸江製作所	1,150
	トレーニング検定球	株式会社　ヨネヤマラケット	1,150

ネットの部	銘柄名	会社名	予定小売価格
	ナイロン　A　15本	鐘屋産業株式会社	3,000
	ビニロン　B　12本	鐘屋産業株式会社	2,500
	70—2112（210ビニール12本　ナイロン・テトロン引紐）	株式会社　ジイテイヤング	2,800
	70—3115（20番手12本綿，テトロン引紐）	株式会社　ジイテイヤング	2,500
	70—3015（20番手12本綿，クレモナロープ引紐）	株式会社　ジイテイヤング	2,200
	バドミントンネット　KT—518 ビニロン	株式会社　寺西喜商店	2,400
	20番手12本　倉敷ビニロン	松本製網株式会社	1,900
	ミセキネット　No. 50　VA	ミセキネット製作所	2,800
	ミセキネット　No. 52　A	ミセキネット製作所	2,200

よく使われる用語 ②



カ行の項

ガット（Gut）
ラケットの打面に張る糸。本来は羊腸で、つくったもののこと。打面の糸はストリング（絃糸）と総称するのが正しい。羊腸のほかナイロン製も多い。湿度に左右されず、反発力に富んだ強じんなものが求められる。

カット（Cut）
テニスや卓球のように完全な球体であれば、順回転で飛んできたボールに逆回転を与えることができる。バドミントンのシャトルは半球状なので、同じにはできないが、スイングの要領は変らない。インパクトの瞬間ラケットをいったん止めるようにして、斜め下に切り下ろす。この場合、ラケットは円をえがくように切り下すことが大切。したがってスイングが終わっても、利き腕のヒジは内側に曲がっている。飛行の線が変化して角度がつくため、レシーブをむずかしくする。

クリア（Clear）
クリアー、クリヤーなど種々の表記があるが、新聞用語ではクリア。高く打ち、相手コートの奥深く打ち込むストロークの総称。障害、邪魔もの等を片ずけて、きれいさっぱりの状態にすることが元の意。陸上の棒高走り高などでバーを飛び越すことにも使われる。

クロスコート（Cross court）
ネットぎわに打たれたシャトルを、またネットに平行に打ち返すショット。

ゲーム（Game）
試合の中の一区切り。一般には試合、競技のこともいうが、バドミントンでは15点（男子シングルス、男、女、混合ダブルス）11点（女子シングルス）先取で一区切りになる単位。テニス、バレーのセットに相当することば。バドミントンではセットとはいわない。

ゲーム・ポイント（Game point）
ゲームの中で、あと1点をモノにすれば勝ちを決める場合のシャトルをいう。試合（マッチ）そのものが、あと1点でケリがつく場合はマッチ・ポイントという。

サ行の項

サイド（Side）
エンドの同義語、同項参照。

サイド・バイ・サイド（Side by side）
ダブルスの基本陣型の一つ。自軍コートをタテに二分、二人が分担してカバーする。二人の位置どりはネットに平行で、どちらかといえば守勢的。しかし近代的フォーメーションでは、単に一つの形にこだわらず、ローリング・ディフェンスといって数種の陣型を組み、臨機応変に組み変えていく。

（続）



監督は板垣隆房氏

ト杯のスタッフきまる

十月に東京で開かれるトマス杯男子世界選手権のアジア予選対マレーシアめざす日本チームの監督に板垣隆房氏（立大出、日本協会競技力向上委員、山形県協会理事長）コーチ宮永武司（慶大出、日本協会競技力向上委員）トレーナー渡部紘一（中大出、日本協会競技力向上委員）各氏のスタッフが決定。

大会は十月七日、八日（代々木第二体育館）が予定されている。なお、男子ナショナル・チームは六月中旬、ユ杯終了後まもなく第三次の強化合宿（横浜）を行なった。

板垣氏は七十年十二月のアジア大会で日本チーム・コーチをつとめた。昭和34年の全日本総合チャンピオン宮永氏は昭37、39年の同じく全日本、渡部氏はその間の38年全日本に優勝している。

五輪監督に 川端理事長

ミュンヘン五輪で、史上初めて〝デモンストレーション〟として行なわれるバドミントン競技の日本代表に、中山紀子（弘文堂）湯木博江（河崎ラケット）小島一平（ヨネヤマラケット）の三選手が正式に決まった。日本協会の常務理事会で承認したもので、監督として川端昇市理事長が同行する。

一行の出発は八月二十二日、帰国は九月八日の予定。

中国でバドミントンの全国大会

六月に中国では、文化大革命後、初めての球技の全国大会がいっせいに開かれた。

現在の中国では最もポピュラーなスポーツはバスケット、バレー、サッカー、卓球、バドミントンの五球技。どこでもやれるところから大衆的な広がりを持っており、毛首席が体育運動の発展を呼びかけてからことしで20周年に当たる。

ユ杯の大成功を追いかけ、次の女子国際競技会の開催計画が進んでいる。

デンマーク招待（本年一月下旬―二月初旬）を後援した東京12チャンネル・テレビと、日本協会との間で具体的な話し合いが行なわれているが、時期的には来年一月下旬から、一国を対象とせず、〝ヨーロッパ選抜軍〟のかたちで六～八名を招待する案が有力である。

時期としては本年中にもという意見が出たが、五輪、ト杯、国体。全日本学生、全日本総合とスケジュールがつまっているため、第一回の本年と同じ時期が適当ということになった。

デンマーク・オープンをはじめとする大きな国際競技会は毎年二月から四月に集中しており日本協会としては、できれば日本での大会を、これら国際サーキットの起点として盛り上げていきたい意向。

欧州選抜女子チーム

招待計画（来年初頭）進む

現在、招待の有力候補としてはカガード夫人、フリント（デンマーク）ツェドベリ夫人（スウェーデン）ゲルラッカ夫人（西独）ベック（英国）リュスケン、バンビューセコム（オランダ）等があげられている。

具体的にはミュンヘンで五輪デモンストレーションのさい、日本の川端監督が折衝にあたる予定。


水鳥 検定合格球
ファストゴールド
ファストシルバー

ファスト印シャトルコック製造発売元
有限会社 ジャワ商会
山形市六日町7 28
電話 02362（22）3994(代) 3280・0545

今月の言葉

少年少女時代にスポーツできたえた体力や精神力は、一生の間、たくわえがきくし、いつになってもガンバリのきくからだと心を必ず養ってくれるものである。彼が…中学か高校時代に味わったスポーツクラブでの苦しい練習の記憶は、決して彼の頭の中から消えることはない。

青春は自分自身を発見する時代なのだ。消極的に成功するよりも積極的に失敗する勇気がほしい。（「自分自身を発見する」鈴木健二）

筆者はNHKアナウンサー。毎朝の「こんにちわ奥さん」の司会を六年間続けたベテランである。その鈴木さんは自分のスポーツ経験と、それから得たものを次のように語る。

…小学校時代はプールへ一度もはいったことはなく、1㍍も泳げなかった。しかし、何かスポーツをおぼえようと思って、中学（旧制）に上がると水泳部に入れてもらった。いきなり水にはいって、見よう見まねでバシャバシャやってみると、けっこう、からだが浮いて前へも進んだ。

以来、いつも補欠、それも名ばかりの存在であったが、四年（昔の中学は五年まで）のとき外房州の10㌔（約16㌔）遠泳に全校でただ一人成功した。このときの喜び。その後、何か苦しいことがあると、いつもそれを思い出して、「がんばらなくっちゃ」と危機を乗り越えてきた…。

若いときには、無限の可能性がある。他人のものはなんでもうらやましく見える。つい、なんにでも、手を出してみたくなる。それもいい。だが人間のやれることには限りがある。一時に一つしかできないのだ。

目移りがして、あれも、これもと手がけても、結局は、ただやってみた。食いちらした、そして身につかなかった、ということになりがちだ。――まずかったなあ、と、そこで教訓を得て、再出発すれば、それはそれでよい。しかし、最初から迷わず一つの道に進む、ということの方が、より効果的で、得るものも多いのではないか。

バドミントンの道にはいり、こと志とちがって、いつまでたってもうまくならない、という人もいるだろう。それにはいろんな理由があるにちがいない。しかし、だからといって、そこで止めてしまったり、「うまくならなくてもいい」とフテくされてしまっては、おしまいだ。一つのことをやりとげられないで、なんで、ほかのことに転向して成功するか。

どんな人の前にも、カベはある。スランプにも見舞われる。一流選手だって、途中では、何度かその競技がイヤになった経験を持っている。

その人が、のちのち人生においても、一人前の人間になれるかどうかは、そんなときに、どう決断するかで決まる。要はあきらめないことだ。おれには才能がない、バドミントンなんかやったのが失敗だった――こう考える人は、技術の才能がないのではなく、努力する才能がないのだ。

〝ボールはまるい〟とサッカーの人はいう。この意味をよくかみしめてほしい。

迷わずつき進む
消極的成功より積極的失敗を

バッジだけあります
ユ杯 プロとポスター売り切れ

ユーバー杯関係のポスター、プログラム、バッジ等につきましては、多数の方々からお申し込みをいただき、ありがとうございました。

現在に至るまで、なお申し込みが続いておりますが、残念ながらプログラム、ポスターは全部、売り切れましたので、あしからずご了承下さい。

ただし、バッジは送料込、百七十五円のものを追加製造しましたので、もう少し在庫があります。よろしくお願いします。

編集室

○…待望のユーバー杯3連勝が達成された。喜びのすぐあとに、次期へのきびしい戦いの準備が待っている。日本チームは勝利のインタビューで「この瞬間から、新しい戦いが始まった」といったが、それを単なることばの上だけのことに終らせないように願いたい。

前回も協会関係者は同じことを述べた。さいわいユ杯を守り抜くチームはつくることができたが、その途中の道程では、一線級選手に故障が続出、選手自身の心がけは当然のことだが、協会自体も健康管理についてまったく〝おざなり〟でしかなかった。しっかりしてほしい。

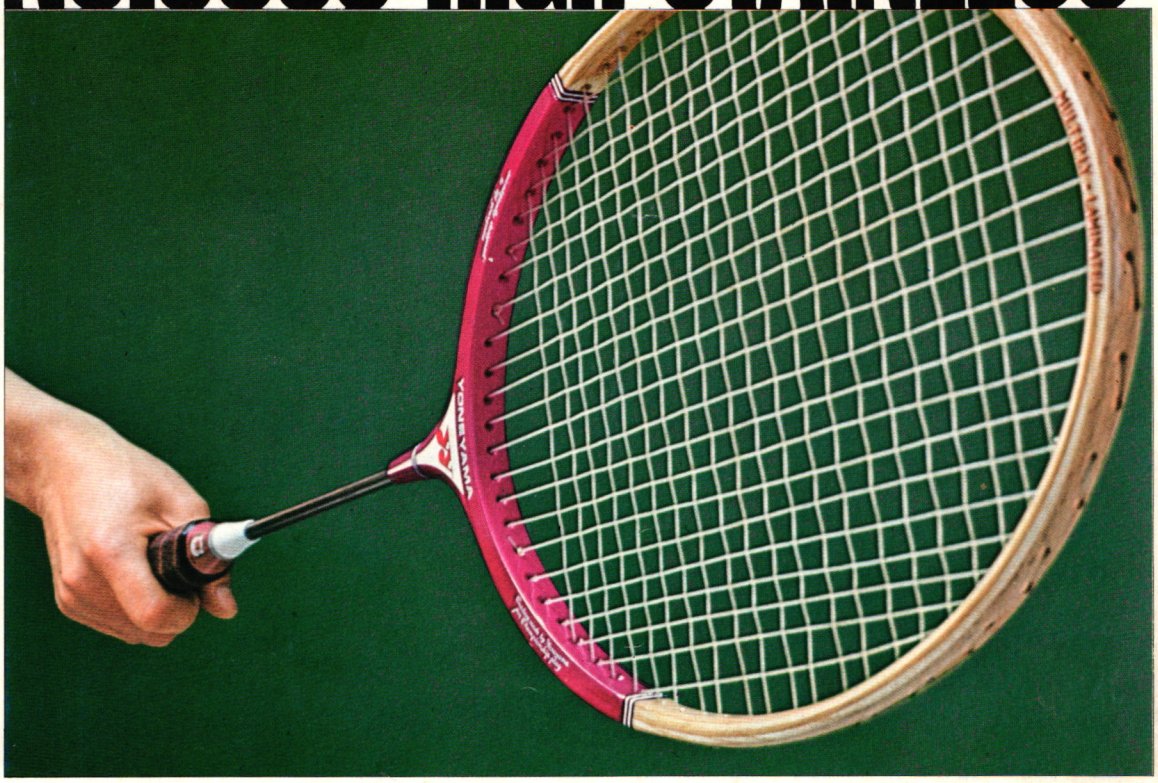
○…今号は紙数の都合で、これだけしか収容できなかった。次号には連続写真等を中心とした豊富なグラフを登場させるつもり。なお、最近、読者からの要望の強い技術講座、さらに全国のニュース等については、現在、アイデアをまとめつつあります。メドがつきしだい、お知らせするとともに、実行いたしますので、お待ち下さい。では次号でまた。

【バドミントン界】第34号
昭和47年6月25日　印刷
昭和47年7月1日　発行
編集兼発行人　川端昇市
発行所　東京都渋谷区神南一の一の一
岸記念体育館内
日本バドミントン協会
電話　四六七・三一一一（内線）二五一
四六七・七〇九五（直通）
郵便番号・一五〇
振替口座・東京三二一九三
印刷所　東京都豊島区南大塚二―二九
明宏印刷株式会社
定価　一部　百三十円


SunBatta
SUNBATTA
SUNBATTA KING
SUNBATTA
It's Excellent in the Court.
SUNBATTA KING, KING MATE
SunBatta TOKYO
サンバタ
MOROE SEISAKUSHO CO.,LTD.
46-8, Sasazuka 2-Chome, Shibuya-ku, Tokyo, Japan
Phone : Tokyo (03)377—4401

月刊「バドミントン界」第34号
昭和四十七年七月一日発行（毎月一回一日発行）
発行所 東京都渋谷区神南一ノ一ノ一 日本バドミントン協会

No.9000 HIGH STAINLESS



未知のちからを隠しもつ

ステンレスのシャフト

しぶとい弾力。まったく鋭い切れ味。瞬間に炸裂する攻撃力。いままでのバドミントンラケットでは、とても出せなかった鮮烈なパワーです。シャフトにステンレスの特性を生かしきってありますから、難度の高いテクニックも思いのまま。これぞ、バドミントンを科学するヨネヤマの、新しい自信作です。その名をハイステンレス。その真価は、世界に点在する一流プレイヤーたちに問いたい。

No.9000ハイステンレス／¥3,800（フレームのみ）

ヨネヤマラケット